作例類語

伊部

四之巻

和書門 類
四三四四六 號
一三八 函
七 架
一〇 冊

内閣文庫
和書 類
四三四四六 號
一〇 冊
二〇二 函
九 架

内閣文庫
番號 和 43446
冊數 10 (4)
函號 202 183

作例類語

四之巻

神祇官文庫印

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫印

作例類語四之巻

出羽國秋田殿人 吉川大江忠行撰

伊之部上 二之音自何至曽

發言に立るいハ用言にうけたり 辭言のとにまゐる例あまた 古事記傳四十一の巻廿二丁に見へたり

萬葉第十 青柳のいとのくはしさ春風にみたれぬいまにみせん子もかも

同上 天のいと川なみはたゝねともさもらひかたしちかき此せを

同上長哥 天地乃はしめの時ゆ天の川いむかひをりて云々

同上長哥 小男鹿の妻まくい續みつきをとてまほれ云々

此いは斯の義にて的當とさす所ありていふ詞にて親の辭也 又いは右の外にも山のへにいゆきさつ男ハ云々あまた多くよせり 又ほか多く出せるいろいろ いろいろのいろいろ いかにしたるハ刈持のかた考合へし

一

屬し是等の名は甜の義にめてたき事ありてはいふ〔?〕
形ならいひつる○人の名のうへにつけていへる名は讃よし保よしは
よみかし君解之の上二十五云繼艶紀愷那(ケナ)繼倭(ワリ)倶吾(コイ)伊
笛吹(フエフキ)のなる續紀宣命に爲奈仲麻呂卿百濟王福信伊統
續紀宣命帶刀舍人伴健岑伊なとも側ありとそいへり
万葉第三 いなといへとかたれかたれとのらせこそ志斐いはまをせしひかたりとのる 志斐嫗
同十四 我せなを何とかもいはむ〔?〕めあはぬ紀の〔?〕とめてれとも
同十二 何ちらさありなくにあてゆあへとも家なる妹はいかにみせん
同上 むろをみ我つら木乃実の根をはりまつはまに欲きつるもの

朝ん ほられぬんあとは甚深くに出せり
いあふく いは発語にて仰くをいへり

万葉第十九 長歌 おくれたるうからは男もいまさとつてさゆひおらしびとせて(めしえて)

いかたの床 いかたは和名抄に桴筏をよめり 艀䑨も同し
名寄に 大井川岩波たかく寄られていかたの床に嵩は来すとも 〔?〕
同上 大井川くたすいかたの山かせにいかたの床乃まつによそしき 〔?〕
同上 大井川紅葉は暮をみなれ棹さしてやいかたの床そ涼しき 知家
五社百首 後鳥羽院 暮つるも聞ゆとも松河やいかたの床は〔?〕てさへしめる 俊成
続古今集 浮ぬるいかた乃床は立ちうき手山より出し月そさやけき
為和集 夢庭筏 さよふくる夢まさめて大井川いかた乃床にいあらん
新葉 春之 松川のいかた乃床になれ棹なれてもあれる袖はぬるらん 前大納言〔?〕
雅経集 松川や月も浮まに浮枕いかたの床は夢もさそはれし
新後拾 大井川せゝに篠よるみなれ棹いかた乃床の月もや〔?〕 為家

筏士

句題百首
世渡山川
隆良朝臣　筏士は杣やま川のあさきせをわたるはあやうき世をそおもひつゝ

久安百首　とかせ川ちとせの筏士の総手綱にひきし年のくるゝ哉　基房

筏手たらむ　夫木集注解によれはさゝらへせはこゝろみに打ならふ
はりそのふし筏をくたらせも波によせられてたらむ筏はこゝろみよ
さされはあられていつらてそよあるよし

夫木集
夫木筏題　瀬つせよらむ筏のゆきつらにとられぬかえ筏はほつるか

雪玉集
松川筏　岩まよはくたす筏をひとつ筋によせてそひと来ぬ川波

新撰六帖中　大井川くたすはやまく岩瀬によりて筏の道をの世や　後京極

新勅撰三　とかせ川岩まよくたす筏士や波にぬれてもこれをわたらん　後鳥羽院

筏棹

十五番歌合　筏士のやくもともしらぬかなれ棹さしてくたる月を待らん　後京極院

玉葉集
祝部成茂　筏棹にしきをさらす時はあやなの川上よみち散にし

一条大納言家歌合　大井川うかめる紅葉は筏士の棹の雫をはらふともかな　能宣

筏にのる

拾遺集
河筏　松川にかくる筏のうつらぬまも流る波はやき世なりけり

新撰六帖中　なめ山のねちこえてみたらせは清瀧川にかくる筏し　後京極院

千載秋下　いはして岩まもみえぬ夜は清滝の筏おちてきつらん　前大納言

夫木集　風ふけはとなせに落る筏士のあらの衣もにしきなりゆく　俊頼

筏にかゝりて

拾遺集
冬　筏おろす杣山川のあさ瀬川ふねとてもかちわたれ
金葉集　大井河ひのさほき時は流れはおろし筏のなかに見えこそ

拾遺集 恋 筏おろす杣山川のあさきせはみをたてゝもさはらめ

新勅撰 恋一 大井川おろす筏のいかたしはあれてつらさ恋しるらん よみ人しらす

元真集 吉野川おろす筏の折々によるともやまぬ波のさはくを

新古今 秋上 筏おろすきよたき川のたきつせに散てなかるゝ秋の紅葉 [illegible]

筏の綱手縄

久安百首 ときはせ川さす筏士の綱手なはたゆむかたなき年のくれかな 安藝

筏縄

夫木 一 杣木引[illegible]の川瀬の筏縄くるゝをいそく世をたてつる [illegible]

筏くむ

宝治二年百首 遠近の岩こす波を引よせて杣山川に筏くむなり 源経平

筏さし

夫木集 川上 筏さしくたしきつるをあらためて[illegible]の川上紀[illegible]

雲玉集 [illegible]筏さしよる川尾に我[illegible]水[illegible]

筏のうれ 筏おろすの[illegible]も出合[illegible]

河明 [illegible]

家集 筏おろすあをの[illegible]川せきとめて[illegible]秋をまつ[illegible] 好忠

筏の若[illegible] 夫木集 [illegible]の湊の筏さしおろし我[illegible]やこゝろらん 後九条内大臣

筏の[illegible]

万葉集十三 斧とりて[illegible]の杣木[illegible]て筏につくりにやらぬ[illegible]

同上一 泉川にもてこゆるまきのつまて[illegible]たらひ筏につくり[illegible]

[illegible]の筏 杉の筏 松の筏 [illegible]筏 法の筏

四

花筏　花を筏にたとへ　筏にみなれ棹　紅葉の筏
以上稀に詠　昔歌には出せり

碇のつな

千載　舟人のおろしいかりの綱をへて君をとゝむる（?）ことは　耕（?）

碇綱へにとりよする

新六帖　おきに出る海人の舟の碇なはへにとりよするあまのたきなはもあり　光俊

同上　返る浪にさきさる小舟の碇なはゝとりなほしても昔をそ思ふ　衣笠内大臣

同上　悪にのこさるゝ舟の碇縄君かこゝろのめくはやすし　為家

碇と綱

山家集下　つよく引綱手とみせよ最上川そのいな舟のいかり綱なくて

碇おろして

山家集　最上川綱手ひくともいな舟のしはしかほとは碇おろさん　常陸坊

返し　つよく引綱手とみせよもかみ川そのいな舟のいかりおさめて　西行上人

新六帖　沖つ舟おろしゝ碇の綱手なはあやふからぬ（よるへイ）たのみなれとも　信実

舟手碇をたつる　稀に詠　昔歌には出せり

碇うつ

望家居 波上之交　碇うつ福もあくてや見えぬ路よりよるるあさへのしかの人　長治

いかゝり　書紀に甕尾星（ミカホシ）も厳（イカ）きを云　甕栗も厳栗之イカキをミカ
といふ例ハ仁徳巻に　ミカシホハリ一ハヤ一チ二ヲヽハ速待（ハヤマチ）といふ枕詞
にて厳（イカメ）しき湖（シホ）の速（ハヤ）きと云るのつゝき也

万葉集　まくらくれ人をはせて見るの中にあるめくらなりし

雪玉集 秋述懐　まことよ秋の葉いはかなりの時にあらてもさと見えぬ（セイ）

いかり猪

古今集 雑躰 眼こある人の国はいかり猪すら世にまきたるあさしき世をしれ道をしる

於イ無名 いかり猪の石をふみてふみしいきたのきうふそこておもむけれさかれ

いかきを越る 神のいかきを越るの名にも出 いかきは斎垣(イミカキ)

同

古今集 恋四 思ひみて神もつれなく祈るとも今はいかきも越ぬへき身を

新続古 恋三 つれなさや祈るかひなくうききことのあはれに越る神のいかきは 定家

万葉十二 ちはやふる神のいかきも越ぬへし今はわか名のをしけくもなし 人丸 於イ無 歌モ出

伊勢物語 ちはやふる神のいかきも越ぬへし大宮人のみまくほしさに

いかほの尾

上野の地名にて 甚所にいかほとも云り いかほの沼を

なく尾 同

万葉十四 いかほ尾にかみなゝりそねわかへにはゆゑはなけとも子らによりてそ

新千載集 俊成 忘るなよ越てこえん いかほ尾のくちせぬほとにたるかあめ

斑鳩(イカルカ)

よるかの池といへるは 桃刻にて 万葉集 いかるかのよるか池

池のよろしくも君をいはぬ思ひそ我する 斑鳩をいかるかと云ハ

古代の名にて 世なるおのつからよりて来つるをまてよるかの池

まいらもみしろ 又池ハいかるかの名にありて 冠云にハあらぬなり よるか

池のよしきこえハ也 いかるかの名乃大和の平郡にあり

上宮太子の立所をいかるかの宮と申 後寺名を法隆寺と

改む 或ハ斑鳩寺とも云へし 斑鳩今鵤の字にもあてゝ

人のしらすとよりきしく 冠辞考 鵤 貌(カタチ)似鴿(ハトニ)

而白喙(クチハシ)者之 和名集にも出

ならて　書の名にし負ふ山寒にもの衣あるいかるかのものり　寂蓮
夫木集にいかるかにさらほしといふ読を依て伝り当る事は何をいふ所定まら
於イ義端にいかるかやとみの小川乃とえへるて我大君の御名をもとされめ、
抄よりはいかるかは聖徳太子の宮所なれは富の小川は其地にあ
る川なるへしといへり　猶いかるかの事和訓栞にくはしくみえたり

五十日子(イカコ)

東鑑に十二月廿九日新誕若君五十日百日(イカモヽカ)儀なとといへる
事あり若君とは実朝公をいへり此君は去年の八月九日に生
れ給ひて十二月九日は百十日に余られり今の世にも児の生れて百
十日を祝ふは昔の百日の祝ひなるへしにて五十日と百日とを
あはせておのしその日あてられる日をいはへる事なりしをさてに一度
の事になへるはそのうみあはせて百十日にあたれる日に一度に祝ひ
となるあらましにかりしみえて玉勝間一の巻にいへり又斗ち宮に
若宮源の君人すゝみて赤子の事をイカコといふ都にて史訓
されは通はせたし　笑ふ人もありけれと子生れて五十日(イ)めを五十
日(カ)の祝ひといふ事源氏にもみえたれは古へ言なるへしといへり
土佐日記到舟のつれ手に書きの日を四十日(ヨソカ)いるまて我は一日をめり
此イカを五日と混せれて宣長は四十日五十日と大凡にいひへるとは
いへり源氏柏木巻に此君五十日のいはひにに成ひて如く志なるらくし
うみてあらみへめ
続後拾遺巻二　きみのゝ史にうさふし近江あかいかにいはひて何とふさにて祝ほ

衣架(イカ)

衣架はみとてうみとといへり今は衣桁といへりされと衣桁は衣
を曝して筆端によりて杜詩に翡翠鳴衣桁といえるなり久保の

さはらに云漢雲間営に衣手のたなかきりとつゝくは装束のこゝ
ろなりみな衣桁のことに衣桁の事ともあり云々今案に衣
桁を夕すといふ事也和名抄に衣架ミツカケと有りうつ木に桁
かけてのちにあやうき衣をぬきかけていふへしといひて云々是
をこゝにいふとよめり
散木集 はつ夏にいろよかくれる葛をたなはたれをぬしとて人のきるらん 俊頼
此哥は為忠頭にいふは衣架ミツカケとてきる衣をかくる物之云々としへりみ
はつ夏の比の衣合せて見るし
いかつち 気瑞禽 歎紀に云 いかつちとは又はある神とのたまはく
ある神とのゝしる也 いかつちはおそろしく覚えて哥よみかねたるへと
いへるを直に雷云 いかつちは雷の哥として何れも好もへしよよよ

り恐しくよまん哥にはおそろしよにはらん哥の姿によりて中々わ
る神とてはおそろしき事をもいふへし 佛足石の哥 伊加豆知乃比加
利乃期止岐己礼乃微波志尓乃於保岐美都祢尓多具覇覇利
於豆閇可良受夜 ○和名抄 鬼神部 雷公一名雷師 和名イカツチ
万葉第十二 古哥 みなくちをあともひあひとのなるつみのさるはいかつちのきこえてくる 人丸
万葉第三 大君は神にしませは天雲のいかつちのうへにいほりせるかも 人丸
いかる 水のあふれてとゝろかれるをいへり
宗尊撰 新六 思ひ川いかれる比の五月雨にせかれても猶たちとあるらん 此歌
いかりをもやる
山家集下 よしあしをあらそひてをとこてはしていかりをのこともせはなれ
いかる やはらかなるをいへり

万葉十一 ちか歌 たえのうよよるにやあありし宇治川の水たへり溢るよそといふ
ことあくかよみつゝ作れる歌にも我も言はぬいまさん君と我も
かよひなん
寛文某 若草もよのまに萌ぬるにいかなる葉よりさける我をたのまき
かつちたる雲分る神とよぶる等くの郡に出せり
かめしき 嚴きもの又岩の手にあるはキツハリとしらるは又リツハある
にあり 世綱は海経文なるいふくつかひられと斎にはめつらし續紀詔
綱に常労弥崇弥所念坐止久書紀皇極天皇の大名の重日を此ヲ
云伊柯之比にあるく舒明紀に嚴矛此云伊箇之保虚にあるく祝詞等に
茂桙伊賀志御世茂御世あらく春日祭祝詞に王等卿等平久天皇
我朝廷尓伊賀志夜久波叡能如久仕奉利佐加叡志米賜へ平野祭

祝詞にも伊夜高尓伊夜廣尓伊賀志夜具波江如久立栄え（ちと）いふ
を合せて嚴言の意をもおもふべし重日嚴矛などにまくおもそうはして
嚴きみ茂波世いかにやまともえあらん廣く繁く常えて大なる
ことをいかしやくもえんは古瀬は茂弥木栄えて樹のいやさかえつにいふ
り栄ゆるをいはれたるかやし又塔言に峰のたちさかえるをいふ
かくいふ氣あるをいふともくりあるくく又いかめしきにあまみる
綱にあるく道つかはれいさての重きもやむてあるくおもくちある
ことと銘綱解一の丑二丁にいへり源氏明石巻にかめしきと高尾
いかちのあやうかし作りつれい云てあるしくをかし 櫻衣四の中一丁に
落ん手あらしかさるりに古きのかめしき手くてのひもしらく
鹿尾詩歌
子の秋 めよみるといふてもある残いの返くすで若竹に乞へきて秋の高尾 仏信

万葉集に事のはなりに ちに譬へちしきて事をはかめしく云る是
形り俗に結構あるくも 芸くあるくもりッパ共ハにある れ
いかよふ　いひ発言にして通ふへく
万葉第八 七丁　久方の天の河原に君待ていかよふ形に衣ぬれぬ哉　旅人
いかくるかし　いひ発語にして ゆくらかし
万葉第一 左注　何なれはしかも山の端にいかくるまて道のくまいさかる　まいてくまへ
いかくろふ　いひ発語にして ゆくるへ又その事を恋て ゆくろふ
ともゐゐり
万葉第六　沖つ浪あれむもしらいかくるかふおもひ見えん あふ人
いかきまへり　いひ発語にして なかして水をゆかきへり
万葉第八 廿二丁　時ぬりの小舟もらもあまさかは水も乳にいかきとちとらり　憶良

い刈持　いひ発語之
万葉第十三 廿二丁　おきつなみ遠のいかりもちき志るなくは　云
いかふも
まほ本 おきつ あみやに過いかふもいかれのあちらゆるかみゆる　坂本の記 四条
いかなく　俗に何ぬくく 世綱に何にいふ事にゆくれ
風雅集中 みなもとの いかなく世間のおきにあらてもをとて　為子
いかさまに　俗にトウシヤウのんい又ドノヤウニと古事記に如何 四十六
集一に 何方御念食可(イカサマニオモホシメセカ) 又十三なくをもゆくまかり 十二下シテのんい之
雲玉 新葉 年におとろへぬる事もしも世をいかさまにせん　前右衛門
続後撰 家の風吹つたえぬをはやそのいかはまにふくとも　明継
玉葉五　何をもつくあさてもゆかしき世の中をいかさまにすくさめん　経継

源氏物語 これはあはれにも思ふも猶かくしきこえていかにはてゝいかさまにせん 知家
続古今 あはれなど思ひしものをそれのいかにはにもさてまいかに
新古今 いかにはまなく嵐つる袖にまつ中々にぞ
金葉集 上 志のぶにもいかにまさせんあはれなん 公實
いかにしく 俗にドウソクゝ いかにはいかにもとうもと二ッの心あ
りいかにのはいドウソシテといふ心いかにのはいドウソシテナ
ニトソあとの心なり
今撰 いかにしくあはきをつくしむらさきまで逢みて後は
いかゞ ドウの心ゝドウカと何やらむ心ゝ又ドウニアの心ゝ又ドウ
ジヤの心ゝ○いかゞはドウニアドウリニアゝ又ナニシニゝ○いかにドウ
又ドノヤウニゝ又ドノヤウニカザゾゝドウシヤトいふはらくる親よも何

ユヘ又ナゼニゝ○いかさまドウ又ドノヤウニゝ又ドノヤウニカザリなり
○いかなるくドウジヤゝ○いかなれドウシテ又ドウシヤウソゝ○
いかなれやドウテアラウヤラ又ドウシヤウゾへドウデアラウヤラ
又イカヾシキゝ○いかなるくドノヤウニと言はれて云り○いかにし
て疑ふドウシテゝ又知られんナニトゾシテゝ○いかにしてさはドノ
ヤウニシテゝいかにしても知られんゝ○いかにもしくドノミチニモゝ
○いかにせんドウシヤウゝ○いかにせましいかにせんを延て云ゝ
○いかゞはすべきドウモシカタガアルマイゝ○いかゞせんドウシヤウソ
ヽヽヨドウシテニアソウハシヤウソゝ○いかゞはあらんドウシテサハ
シヤウソゝ○いかゞせんドウシヤウソヽヽヨシカタガナイの心ゝ○いか
でゝドウゾシテゝナニトシテト知られんもあり○いかでもくドウゾシテゝ

く○いかてかドウシテニアノドウゾシテノ意なるもあり○いかて
いかにもドウゾシテナリトモノ○いかさまにドウ又ドノヤウニ又
ドウシヤウの心也○いかにヒタスラノ心にて一向の音便なり
多くハ皆みな疑の詞ある人の詞也○いかやうドノヤウニ也○い
かはかりドノクラ井又カキリモナキ心也○いかはかりハカキ
リモナキ也○いかさまにもコレハ何トシヤウゾト云意ハ疑なり
いかもあり　いかに　いかにも　いかなる　いかて　いかてか
以上古今類多くあり
いかなれハ　いかならん　いかにして　いかなれや　いかなるは
言葉の上の結ニ出
又其の外かくも　是みないかにも　類の有其外ニも出せり

いかゐ地　うるしぬりの器にいかゐと云事あり金泥にてぬる
事也沃懸(ヨリケン)と書ていかゐくとよむ沃(ヨリ)の字ハそゝくと訓也
そゝくと云水なとをそゝくる也金泥にてぬりつくる故金を
とかしてそゝきかけたるやうなる故いかゐと云也水なとを
そゝかける事を古ハいかゐと云也枕草子にも白き衣いかゐさせ
よとも又いかめしくもあり源氏若菜巻に火とりをさゝへけに
いかゐとあり聖宮寧相定基ハ説云蘭をうんぬるに故ハ
をいかゐ地とハ申也云々
万葉集　おほろや陽のまとゐによかゞのかけて庭にハまなきいかゐ地の　源仲正
息をいふとあれる　書紀雄略天皇巻に猪鹿(シヽ)多(オホカリ)有云々呼吸(イフク)
氣息(イキ)似(ナセリ)於朝霧(アサキリ)とあり

万葉五 大野山霧たちわたる我なげくおきその風に霧たちわたる（おきそは息ぞへ）

同上十五 君がゆくうみへのやどにきりたゝばあがたちなげく息としりませ

まくりのあさきのさ霧の中にあかずしき霧の中にも絶せり・

いきうし 新葉のうきをいへり

拾遺 あるゝの上 ゆらいきじといひてかゝるともいさめぬ思ひを出てはふ

古今 人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひていざかへりなん 源さね

息つきをゝる 息衝にて長息（ナゲキ）とやりて同じ心の切なる時に

いふ言にて今ころんにいきをつくとのみなりあはれり 古事記哥

ま みなとりのあさきの息つきと云く 枕冊子にも海人の海に入ぬる

より 出てくる事をと云るにも舟のへりをおさへてはきいでたる息

なくすそ織なとてつみなる人とまよひ出るにまいて蛍のうつきして

うき出ぬらんはもく大きなる息つくものあはれなりけり

万葉五 ゆくのすやいきつきあかしなきちるは新葉のうきよあらなれり（あらなれに）

同上八 波の上ゆみゆる小島の雲かくりあないきつかしあひ別なれは（つれは） 金たお

同上十二 なく八名もいたらじ命をあまつゝも我は息つくべき人にあらなくに

同上 いきのをに我息つきし妹すらを人妻なりと聞はかなしも

同上 長歌 たらちねの母が手はなれ世間の息つきわたり我恋ふる心の内を（うちにおさへて）

同上十七 長歌 玉ぼこの使の見えぬあやしさは息づきわたる恋しさもなにに

同上廿 我妹子は息の緒にしてたゞのみねかくしをみるとしつゝもね

いきとかる 神功紀 忍熊王 潜田に沈みてしぬる人を以（イニタ）間多採

わ 出さりぬるは武内宿禰の哥に

あふみのみせたのわたりにかくめてしえたはいきとぶらしも

日本紀に臆悒をいきとほりとよめり 恚廻(イカリモトホル)の字にもよめり
万葉第十九 ちる 白ぬりの小鈴もゆらにあはせやりふりさけみつゝいきとほる
こゝろの内を云て
後世はこゝろの怒(イカリ)をのみいふて悒の字乃義にて悒は字書に不安
也とも憂也とも注せり 古事記に不恐於悒となんいへり 字鏡
に悁 イキトホル 忿 イタネウレフ 又 悄 イキトロシ とあり
いきこゝろあさく 寝させきなへり 世説にも後文にもみえし 源氏物語
巻に 荒しかりける いきこゝろ居たさしもあるまじきとて云て 竹
河巻に 哀何をおもふとて 命もちゝつんとこゝ之 角総巻十四丁オ
なとも出
若紫巻 あくかれもあへて いきさくいきさあさみたてされ

枕冊子二に 戻ぬるをしつるを我ながらある老我のあはれしよりきこえて
はいきこゝろあしと思ふらんにひきゆるしつる ことなかりし
生死の二ッの海 死生を海の深きにたとへつるへ 経師云 義
心経云 何能度生死海 入佛智海 云々
万葉第十六 未来無常 いきしにの二つの海をいとはしみ 塩ひの山をしのひつるかも よくしきに
新古今 いきしにの二つの海をはなれしあかつきあやまちに 沙弥寂光 頓
いきの緒 命をいふ 万葉第十に 氣(イキ)の緒にみとめ玉の緒にて同し命を
いふて思ふ之 息の緒にして命はつなくいふておほし 古事記新
まちともめこ まさにいりびとも みまきいりびこや 二度よめり おのか
おのぬせるに たかつくに云て 傳廿三の六十五丁に云 おのか
いみまのき 入日子の己之をいへ 命といつもまして見て 歌を續けり

指て絶さらず志己ろ事を強ひて緒も此意の名なり命も
生(イキ)のつきずて絶さるなといふなれは是我をとゞむるな
るべし又玉のをといふも魂(タマシ)をもつからは持つゞくるよりいへる
なるべし年の緒長くといふも年のながく続く事也万葉
にいきのをにおもふともよめるも生(イキ)の緒(ヲ)の意にて命に比して
思ふといふものゝ又もあるべし命は生の緒なれは右の事を見る
考へ合せてをのがをは己が命といふ意なる事をさとるべし
しておのがをといへるをさとるべき意なり

万葉十一 いきのをに妹をし思へば年月の行らん別も思ほえぬかも

万歌 哀傷 やすむまも苦しきにおもふ命を副味にいきのを事つなぎあへる 一云徽

万葉 旋頭歌 息の緒に我は思へど人めおほみこそ吹風にあらはしばしばあふべきものを

続後撰 恋之 いきのをに思へば苦し玉の緒の絶えて乱れな知らば知るとも 人丸

万葉十二 いきのをに我思ふ妹は遠くあらまし始をそなたか我らん よみ人しらず

息を数ふる

拾玉集 三 めをとぢて息をかぞふる床には身の行は命は数ふるへなり

いきのをに 和訓栞に云 遊仙窟に窮鬼をよめり 不終天年死
者窮鬼といふ いきたまは生之を云て魑魅の訓ともされは怨霊なる
べしといへり 魂(タマシイ)をいふ意なり

夫木集 恋 しのびつゝぬる手枕にいきてたまちへ身にそはぬ うらむ

同上 恨る 出て川にまぼろしなる人 待 ちらむおそろしき 仏数

枕草子ふみ落手ありてつぎつぎ上の涙はちらちらないひける いきてこま
さに 薜(トコロ)をさらさらとして云とあり 太平記 妙寺に 生霊(イキレウ)

あり又みつ霊之ともいへり
出る息　出る息いふをとまらん經にもいふあり出せり
いくり　いくりハ發語之ことはハ石之海石(イクリ)神紀にゆらのとのなかのいくり
のふれたるいくり云く　釈日本紀句離謂石也異助語之とあり日本紀
私解　此歌の淡路の…まて　沖に大なる岩
のふかくあるを沖のいくりといへりといふも
万葉六二十五首　ことはへくかはらねさきあるいくりにそふかみるとある甚藻（かそ云く）へつも
同上六十四首　月乃うつきとふかもちの西藻なあまの…沖ついくり
まかりとなりてまれもとにうつきてこそ云く　赤人（海なる石をいふり）
又万葉よ妹か家よいくりの森の藻の花も又まつん妻も常也
としみん是ハ妹か家よいくとうつしまていくりの森ハ地名也
近ハ是等の事あり
いくさ　射合(イクハ)さる箭(サ)といふ事也又矢を射るにあたるをいふ事之
もの兵器(ウツハモノ)あるをその器をとる人をもつものとふ
皆甚人を防して　いくさと云り　然し的又射をイクハ
とよめる古事記傳二十二の廿六丁にいへり　的(イクハ)臣(ノオミ)の氏草によめ
るハ仕丁之又丁ともいへり　傳三十六の七才に　假字ハ和名抄近
江の国淺井郡ハ名丁野ハヨホノ又同書に　膕ハ膕曲脚中也　和名
与保呂字竟ニ膞ハ与保呂乃須知(スヂ)脚之後大筋なとあるに依
るへし　書紀に膕(ヨホロ)蹠(クボ)うつ…ハよわろ過あつり宇
治拾遺…によわろさせられハたしかに…
ともなりよわろハ俗に足のひつかみあり　甚筋をよわろ

もちといふもこれもよみかたより出たる名と覚えたり仕丁
は書紀にツカヘノヨホロ又ツカヒヨホロなど訓て丁の中にも一品
なることなる丁をいふにはあらざれどもさていふなるつらをゆるとの
ろ数にいひてヨホロと訓べきなり云てまつりて丁といふは民の役
便ならずかかる者など云名也中昔の者ともよみ夫といひ今の世に
人足と云ものなり云て諸国の民五十戸の内よりさゝへつて京
にのぼりて諸の官司につかふるを三年つぎて一番する者
つかふる故に所々によりて何丁といふ名あり役丁荷丁軍丁匠
運丁などのかしこと宮長云へり金葉集に源俊頼の運丁
をかぞへれば二十の星人数をしるによりて猿よみたりの歌合
せにみへし妻は歌にあり

万葉廿長歌　あづまをのこは出むかひかへりみせずていさみたるたけきをのこ
軍にはつかへまつるものぞよく
もののふは万葉集一の廿丁に云といへる詞をよく中昔までは兵士
をもいへりきて日本紀雄略天皇の巻欽明天皇の巻に兵
士の文字をよめり水鏡にみかどのいくさの道よりはじまり
まつりてよりつるまでさかえて今も世にかくいはれて
いくさといふはあやまりなり之といへり又古事記に黄泉軍といへり書
紀神武巻に女軍男軍万葉二に流軍をうつともいひ六
に千万の軍なりともことあげせずにみたらば皇御軍之戦の時あらそひいくさ
といへり凡戦をいくさといへる事古事にはみえていと後の事
なり然るにいくさは討合気といふ義の略なりといへり

戦の字をいふ所にしるせる例なくてたゞ古事記傳十二の丁二十
丁にいへり 書紀天武紀に習射(イクハ)観射(イリサス)なとみゆ
いはれず 此発語にて杙あり今云杙とのことは古言にて
なし古事記傳建命の段にいはまのかく山にかよはしたる
かしはしらはとらしはいふ若木の事にて串とするといへり神名ニつ
の杙生といはしとやしも 此事とはかく五百箇真賢樹の八十玉籤と
もいふ五十串ともかくいふも葉茂き若木のことある事を
しるへしと略解にいへり 伊久比衰宇知ハ齋杙(イクヒ)を打なり
斯沖も同も伊を発語といはれたるはいかにぞ見て伊と云発
語ハ用言の上にこそあれ体言の上にはあることなし 此ハ鏡
玉をかくとあれハ神祭の具とおぼしくされハ齋杙なるへし中巻明

宮川の大海原に章具比(イクヒ)とあるといへるなり 齋を伊といふは
齋垣(イカキ)なとのごとし 傳の三十九の六十六丁にいへり
万葉巻十三長歌 古事記之杙 初世の川の上つせにいくひをうちしもつせにまくひをうち云々
いやの峯 是河集甲斐国の名所なりといへり はつらき
らせて
夙雅集 ちちちに川まちは冰に浮まほり浮てはくゆるのみねのしら雪 順徳院
花葉 是河集不老不死の葉也蓬来にあり 老せぬ死せぬ
の葉の名にいへり
壬生二宮中 住吉社哥合 君か為よきを摘もよりぬらし いく葉くら住吉浦
杉玉集 山 いく葉か蔵に縫へしとありよしも見ぬを摘も老せぬ山
捨物語 亀山に生ふ葉のことなり 近いともかるまも老せぬ 戒秀法師

みてぐらの四手　神代紀一書に真坂樹八十玉籤まで五百箇
野篶八十玉籤とありて串は玉幣を著る料の栄木と小竹(シノ)
なりみてぐらしは斎串(イミクシ)之まで穢をさくる時なりてぞ切りてはさ
むなり苗代の水口にもさしたる玉のみてぐらしるしとあり

万葉十三　みてぐらをならしとたてまつるさかきめぐらつ恋ふるみそぎに　ともしと

堀川百首　みな月のなごしの川原にいくもちぎりふるは神のへし

年中行事歌合　ぬさはせてつみなしはへの杉垣にしるよ明れは幸はさあれ

拾玉集七　さ田川にみそぎして波数ふ秋風かよふゆふかげの夜

ちほうあい歌合　かく家さ田なみ出まつりを神たちにかかるもれと思ふ哉　基俊

堀川百首　谷水をせく水口にいくしさいそしろの田まだなほまさるなり

五百番歌合　みそぎ川いくしの手てなびきふるる波まにかよふ秋風　前宮内

続後撰　雑　みそぎするいはしの四手に風過て涼しくありぬ水無月の影　隆信

生に紙をつけてつる　生の紙は六帖四にて切る日のなくらつかぬ
諸祭使にいくまなしのみかはなは遠持にいく宣旨無いくまちなく
名ふ後撰遠無かんとそ名に桐つる巻いきまはしきに合形り
なり手なる巻にてなんいく字もあるきて後撰集にて我身めく
かんくあらは後にて撰に字ぞ桐をいかもやと名にて折もまそのれ
小侍従集かうさいまて志あらはあされし未来集にも後撰にかく世に
よう住吉の浦なく拾ありさて此桐加行中旅の旅なりてかき
いふるいくいくれとのく旅桐はそのしまめく四服いの旅うしまる桐
多いきて中二服に用ひたるかく務あれいかくあらくあめてそのは
をまたしむるは又右のなく四服にも中二服にも同意なる桐さびられ

何か万葉十八にかゝる詞あり同十二につまてらんかん命にそ大かたは
我つゝあらはゝ志ぬる末ほれり古今序にゆきてらしいはるも
のゝふゝ蜻蛉日記志あんとるへくいふる人そいとつらきやこふるの
みまてはかる思へる外なしとかへり事諸共はみもてみまあし
うるゝとゝかるはゆゝせの絶りゝるゝ事ゝ

源氏 若紫　ゆきかりとてたるう事なん思しきかいろまゐしきこと命へかり

於イ本　亀山にゆく葉のとにかり御ゆきなとめんはしも思きゝられゝ於　蔵玉詞

同上 恋二　あるにせんは命をかへてちらむとへはうちやと思ふ時も何か皆玉緒

後拾遺 十二　志ぬもあるあるきのまゝそれはあはきしうきてと思へき御なから　小町内侍

新古今 恋　都にもあらへのとおなれは聞世らはいかんとそおもふ　為家卿

同上　かれもし生れや限りのなちあらん比ちはゆく雪をんとちてせね　左京大夫

後撰 イ
義備 本にしてそのあはかりは月ゆきていきもえらぬへてうきしき　作者未詳

歟 そ　ゆくさくあり歟甚くゆる綱のつらゝとを綱の玉のを四の
巻ゑ出 助辞本義一覧ゑ綱の玉の緒ゑ此類の三寿七八を出して
其釈ゑ云上件のゆくそは十カ十可あらて維くる綱気十の意
あらは新古今のあまそのとよみぬるは例あまて外のてよ前あらんかた
と疑ひゆへるいかなし人ゑも仰せてきえらしき説此之是らのそいもと曾(ソ)
伎(キ)の略ゑて万葉ゑ山の曾伎(ヤマノソキ)野之衣寸(ヌノソキ)またく天地乃曾伎敞(アメツチノソキヘ)ホ
とよみて後の際限(キハカキリ)涯をゆへる綴之書紀ゑ底宝(ソコタカラ)とあるも宝の
極てある意あれは根かくいふゑ同し是より出て集中歟許
ゝ来てゆくもくるもそゝかゝくるもよめる此ゆくちくの如くて
そこかくのそと一筆てゆくちくちくとも云ふるへき常

まいくそばかりと云も幾量許の意也後の如き書くなるにて
せの急なるを云又いくせのうきみなどいへるもそとせと通音にて
同語なる故とみても知るへし又うしつらしうきつらきなどいへつら
なれと云へるなどに此志は瑕謂ききけれ換る志へらく直にきき換る志
きは希なる劉意なるもあれと然れ叙鏡に出せる類ともの中にて
いちなあらしのなかしはもしもつらしあるものごとくなるのかひさはむ
さらはつらきとなりにさとも活く志は廿行の通音にて古事
記上巻に宇都志伎青人草之落若瀬而患惚時と有る瀬
又万葉第十六の山乃そき野のそき見よくよめる曽伎なるも是之
際もそきも旅の際界をいふ語にて中古の哥ならぬしき際の
あしき際あるなきよみるも是は水脈に深き浅きなるふさ

の通音にて共に其際界涯を云言なること一ツの語と知らるへけれし
き際ちかしき際涯りのよしミ之後世人のなまに云又迩しきせある
際なと云際を却て川なとの縁語とのミ思ふめれと然にはあら
ず古哥に川なとによせてよみたるはさてその哥の志をその
形り川の縁語なるにて思ひ得てなくしつる哥にも又にも多かり
と後世の西行の哥などにも啼るとものを際にせん咲る山田の
京の松の枝ゟ此なとの哥にも猶あるへしめくて衣の類ども然
まなりにさらは流れて云言は猶いて察れとそいふなれば志らしさ
たのしきなと云なりに志文字の如きなりにさは流れて直に志の
音に換る故と云もとよりきえ似しさの言乃意は然に厳て
なりに流れるも猶られしとおもふ際界悪しとおもふ際界楽しと

又ハ際限の意にてみな同事なれともさてハ蹉跎の意なるよし云へ
さて此等の中脱のそのや何の語まてきこえ難してかたきなるハ
みな曽伎を曽伎敵とも只伎敵の誤れるへしといへり。
後拾イ 秋上 わかつるらこなの峯なる霧りはれハそ峯をよそにみるらん 前斎宮 [illegible]
拾集三 東路やいつその山を越ぬらん霧はらふ志のゝ原にまかせて
拾イ 恋五 ゆきかへりあきハ霧の音にみちぬれハいつそれ霧峯と見るらん 前太有は
家集 二条帝の皇女にしても哀へ霧その秋にいつんとそらん [illegible]
拾イ 恋四 あけはしや木のたかみ岩瀬河くそのへ乃みをみつらん よしのふ
雲玉集 後毎 わかつれりともみれとも霧しなそ霧その人乃跡の志ら波
霧こもる 何千何百かとくへ
古今集 秋下 越てふあるハ霧を風なれハ霧をハく我もしとふ思ふ よみ人しらす

霧つ 後拾イ 廿四 あまつそらあまつ乙女の神乃路あらハ霧つきへの数ハいつるへき [illegible]
霧一村 美濃家つとに云 倍に一息にわかれて云こくにて云
くの雲をへたてらハをて一村の雲乃如くにかゝりけるをいふ
堀川次郎百首 わかもあれさ霧 [illegible] 雲を霧一村にこその [illegible]
日上百首 志ろき雲を霧一村にかゝりてたちに [illegible] 西行法師
霧たつ さくらの花に古事記傳を引てたしく渡せり上の霧
その花にむかへり
堀川百首 霧たくしも家つくもあきに [illegible] 月をそらし [illegible]
古今集 羈旅 霧たちて [illegible] 小野 [illegible]
霧ふる

新千載 四一 秋の夜のあかすもあるまゝしけれは幾らともなき世をそむくかな 為経

幾十度

金槐集 よそにみるなみの川波いくそたひたちかへるらん宇治のいれは

新拾遺 玉葉恋一 若人はなし掬ふしかれ幾十度ぞ衣うつらん思ふ人のあたり

源氏末つむ花 幾そたひ君かしゝまにまけぬらんものないひそといはぬたのみに 哥とふ

幾ら

いくらとものこみいくもちらすにおもかけし幾らよいくらもあり

何ほとなり

金葉 恋下 ことはしや木の下かけの岩水いくらちかひぬきとめつらん よみ人しらす

新續 祝 幾らともいはへぬるらん千代の数君か為にはかそへあへし

新千 恋二 むかしよりたえぬちかひの玉の緒も幾らかさねて君にならさむ よみ人しらす

新拾 恋 幾つもる恋は幾らと人をらて袖のなみたにいはしかく

拾玉集 二 いまはことし月を幾らのかすならんあまのかはらのたひの宿り

拾イ 四 あを柳のいとりの糸をよりかけし幾らか川の春をかさねらん よみ人しらす

山家集上 春ことのはなのこゝろをたつぬとて人は幾らのとしをへぬらん

拾イ 上 流れくる瀧の白糸いくらとてくらはたまの緒たえはてぬらん 兼盛

拾イ 夏上 さつきやみのをしみかりて幾らの冬は雪をつもるらん

拾玉集 二 我恋のまさる君をまちてあらは庵の幾らかとはひともなくつもるらん 定家

同上 旅枕ほさてのまきそやきにしもあへて幾らかくる涙あるらん

同上 四 あはれしや幾らとせあまたちらぬ木を幾らか秋にむかへしにつかふる

同上 三 君をまつもいはれ浦の波のたちかへり幾らたえぬ年よりの神

幾その年

新和集 遠松 むかしみまさりの松は植しより幾その年に幾そたちぬらん

同上 前右府
不逢恋 おもひかねて歳をの暮に成にけり逢事なしにすくしつるらん

同上 清輔
追年恋 いたつらに歳のみ年の重りて老行まてに恋路の暮

為家集
哭 逢ことの絶にける哉山松は歳をふるなる千年あるらん

歳を送る

補記
堀河 橋立の松のみよりハ歳ふれとめくるよはひのあまた

歳志まり

古来
古集哥 歳暮に嵐の声すさましきあはれ山の峯の志ら雲 風雅 つ月

赤人 山 歳暮り雨てく人のいきたらぬの吹く山をこゆる庭訓 修記

歳暮

稲荷社哥
今在北杜哥 あせたる石にめくる池の杜の歳暮をこへてきつらん 夫木 つ月

山家集 居所のさき山にたる杜の歳暮をこへてきつらん

歳月と云義 日数と歳との心なり

年々涙
哥合 つきてふる日数ハ歳を庭の冬のことし暮ぬ年

歳のつれ 更にとる歳の心なり

歳暮 歳実 歳の年 歳とせ 歳々 歳玉

歳夜 歳の夜 歳つら 歳柿 歳浦 歳中 歳ふ

歳出 歳有明 歳あつき 歳秋 歳よ 歳志

歳願 以上古今集句なり

川もやるし古 苗代のやるしき 花ののし 秘哥古今集に

歳ともからい以 以てやるもあらぬかにこくくるたくも因

好てふぬかく似かるなり

万葉十五
長哥 たまてし文さぬし扣に以てもあらめ

同上十　さはへなすいふせきものありけれは白妙の衣もつきはよそんかれ　志らん
幾ちよ　俗にトレホドノ久シサのたとへ万葉にも幾久とよみ侍り
とよみけり

壬生　二十上
なよ竹　古事記にはなよ竹とよめるを万葉には弱竹と云て竹のなよなよとしたる
竹なとは云てなよ竹とよみしなよ竹の葉の露なとよみ侍り　志らるれは
コモ
隠り竹を云をつめてなよみ竹とは云へしと云り　家長云節
のうれと此と一つに相交ある竹なるへく然とは名も知らさる相交へ
なる竹の名へされはなよみ竹は葉の志なしくて節此相へ交り合たる
よしの名なるへし　俗にも葉の節此と繁くましり合をつく
ると云も同言へ書紀継体紀の歌にイクミタケヨタケとあり

池鳥　山鳥川鳥なとは万葉によめれと池鳥とよめるは多からされは記せり
堀川百首　ひさしく池への杜若あれはてて紫ふかくかけみゆるなれ　仲実
同上　蛙なくまの池鳥をみとりの岸の山吹の花さかりなれは　同上
なかつきの　さる波の池鳥にさかる山寺座のかくれてあかぬ鴨の羽音
そ水かる
拾遺集　このみゆる池へにさかる菊を志らてさそへてそのいろをみむ
新勅撰　たかゆる杜若の春のかきあてし池へにさかるこのはなさかり
題知らす
夫木集　たかゆる池へによわる蘆まに鴨のさわく声を志るさも
池の名なり
池のそうこ　秋ならひの花に出せり
東部百　みな池の池にてうつに咲くなり　あやにさかりなきさに池の名なりしも
そ菊
池にうて

万葉集十一　あし鴨のすたく池水はふるとも池みそのへに我越めやも

池を古やとの心に云　難波江にはくよみたるは常也

右郷士十　そ池の心　月清のるまに遊ぶあしまより結おのれさらはぬ水に住らむ　寂蓮

池のつゝみ

三百六十首　和歌　あしかもの池のつゝみの柳原さはるに春はあらはれもあをみたりけり　曽丹

万葉集　小山田の池のつゝみにさす柳なりもならすも汝とふたりはも　東歌

於伊勢家　已ときは身をもさしよりはら浜の池のつゝみや君は忘れき　よみ人

壬二集　二春上　小山田の池のつゝみのふる柳なかきみとりあるらん

池水のつゝみ

新続古今　春部五　つれなしな清く池のつゝみこえぬは波なりけり　定家

堀河百首　春中　広沢の池のつゝみの柳かみとりも深く春雨そ降る　顕仲

洛集池　山川の水の落合をせく池の遠きつゝみにあらはるゝ柳哉　家隆

池の室中

夫木集　池水の室中に出てあそふ魚の数さへ見ゆる秋の夜の月

池の下樋

万葉集十一　水をのみ結ふ池の下ひにむせき君をなさけのかたみなりとも

池水のいひ出る　池にかける樋を云それより水は出るなりされはいひ出

るとはよめる所の名にも出

西行集　池水のいひ出ることを思ひとや身をのくさのは露そあるらん

六帖　池水のいひ出ることのかたけれは谷深くこもりつゝあまりある　読人不知

続古今集　いかにせん池の水はいひ出はまへつゝすみわたるかをしとも

同上　恋　春の雨にふりて数ある池水のいひ出るよりわれはぬれつゝ

後撰恋 小山田の苗代水はたえぬとも心の池のいひははなたし　よみ人しらす

新古恋一 せかなくに袖のみぬれて池水のまくいはいはてあらぬのくハかりは　同上

新続古恋一 池水乃深きこころを筆にてもいひ出し後はいかてもらさん　頼信公 兼縁

永久四年百首 わすれてる人はあやしきなかにてもいはぬ乃池の心にはしらねは　六条院 大進

於イ 百首上 日かそなくてまた思ひ池のつつみかねいかにいつてとそもぬれそ袖

夫木集 池凝冬 山吹の花下みつれ池水乃いはひ出るかきいろをかへらぬつつ

新後拾一 もらさしやむかしみてせく池のいはひ出るかきさへつつありとも　前大納言為家

夫木集 池 今はそのよにあらしとも耳嵐池の心は出して哀もいはぬしな

新葉恋一 問ひしな袖のみぬれて池水乃いはひ出るときさとのちつるを　前大納言為定

続古今 恋四 池水のいはてたえぬもや思ひたらん深きこころはいつちもさらさ　定家

池の心 何まてありし池の底なれ池の心中にいかぬひはあらしの水

いくよへぬ

亜槐集 子日侍 万代もつもれ庭に宿の池乃心もきえて松風そ吹

新撰集 庭におほふ池の白氷そのれは池の心まかせにまつ代の末　頼親

壬生二百和上 氷るも池の心はあらそひてきよき氷に池の心そしめる月影

風雅集 深からも池の心もあらはれて松の千年を　忠見 法師

池のあさ氷 池はみきはちりてのくよみてあさ氷よまぬよ　二条家

あくいく世へぬ

百首イ 芦イ 古への池のさざ波みな年ふりき池浪に深くみえさきりける　読人

池のおもて 池のおもとにへるさなかし

壬生二百和上 春風に今は氷もたまふ池のおもてにさざ波そたつ

池あらためる

山家集上　水なくて氷りぞしたる勝間田の池あらたむる秋の夜の月

同上　水なしと聞てふりにし勝間田の池あらたむる五月雨の比

池はた

和訓栞　池贄の事見え

夫木集　恵我なるは恵も恵けしあるとも見ゆく古やの池にはおちれてしむ　仲正

続撰吟　うきつゝも浮世の網にかゝる身の池はた魚をとるにやあらん　為盾

池ませく

新六帖　山の井は影あらはせく池水の下をも清くやらん　為家

夫木集　山川の水の流あらたせく池の遠き堤にあらしく吹　衣笠内大臣

池の水ひろき

家集　水広き池のひろしくひ渡るものなき遠近に遊ぶ　慈鎮

池の鯉わたり

夫木ちる人つ家　うき草のむかしれの池の堤れあちらへいなす風にあれゆる　後九条内大臣

池のさゝなみ

新六帖　池氷のさゝ浪きに浮はてぞ揺もかくまて下にかゝる　衣笠内大臣

池のみなあく

夫木集　さゞ波によせてはかし落氷り池のみなあさやかにみえし　よみ人しらず

池鯉

新六帖　水底にうきてひをさへもさひの余り結ぶも七七　光俊

池の流

あまくよ決め

後撰冬　冬の池の氷にあつる河野の浪ねぶらに数よみ　よみ人しらず

後撰恋　つゝめどもふりきあまれの池水に影まてぞ見しく　後京極

風雅尺　人さしの深く汲ても池の流れは末もくみてぞあやし　後鳥羽院

新続古今 ひろ沢乃池の流れをいはでせきし袖にもるゝなみだなりけん 権僧正公豪

雪玉集 春池 池水の氷あらそふ春風に岩まは花葉色に出つゝ

池水の行方しらぬ

続後拾 題不知 いかにせん行方もしらぬ池水に身を浮草はさそはれもせで 基家

雪玉集 芦間氷 池の面は芦間をせばみ行方なき水よりさきに氷り初らん

池の通路

拾遺 忠岑上 いはねふみ峯の松尾つれもなく住わたるらし池の通路

池にすだく

新古今 みだれしほるとしのうきつもる鴛鴦に乱まさりて 俊成

柿本集 題 み(?)たるゝ池のさゝ波さゝぬかもあらずとまるなく

堀河百首 毛羽(?)ぬれは浮葉あらひせきとめて池のみぎはに鴛鴦なく羽(?)ゝ 俊頼

池のみぎは

夫木 冬 冬乃池のみぎはの芦まさえぬてうへは氷れる 俊頼

同上 万代 かゝる池のみぎはをめぐる野鳥は上毛をつくろふなる 家兼

池にうつりの花盛

秋篠月清 春の池の水にみ藤なみかゝりつゝ松も花咲く鳥も鳴ぬる 摂政

池の玉藻

家集 ぬまの池乃玉水神代より今も絶せぬ浪やかゝらん 光俊

池水草（ミクサ）

蓮の実なし

芸竹集 真傳 みちつくとき花やちらん池の葉波にかゝりてもまた 光晴

池を渡来とみへる 香久山の 埴安（ハニヤス）の池にて鳴く 万葉

法蔵くよむ也けり

万葉第一
長哥　国はらはけふりたちたつうなはらはかまめたちたつ　云々

同猟路池にて
大君は神にしませはまきのたつあら山中に海をなすかも　人丸

池にうら(?)　表のきたへ(?)

万葉第三
かるの池のうらわゆきめくる鴨すらに玉ものうへにひとりねなくに　紀皇女

春池　浦ちの池(?)　鳥羽の池とある(?)　菊の池　さるさは(?)

ゐの池(?)　室の池　田つらの池　田のかみの池　玉の井池　法の池

苗代の池　蓮の池のうちし(?)　氷池の水　みくもの池　池にみくまり(?)

池にみさひ(?)　あなしの池　み法の池(?)　もろ古の池(?)　瑠璃の池

以上池の題(?)共用ひて出

ある年ある人(?)　八月十五夜八幡の御神の放生会あり

家集八月
恵み深くいのるを放つ川水にうくもはかなるよしの月影(?)　季経(?)

新六帖　男山秋のなかはのちかひとて川瀬に放つよものいろくつ(?)　知家

放生会　石清水にうかへる魚を放つといのるこゝろのそれにそ(?)あるらむ(?)　新撰(?)

年中行事放生会
世にふかくてつみをるを(?)秋もはなつは見なかるを放つ神(?)のちかひ(?)　新中納言(?)

生る日

拾遺集　[illegible]　大伴方(?)

いかにせん(?)　生ましきまて(?)ながらへ(?)　世親の流は生に(?)ゆく(?)を

うれへる草よいゝ(?)

後拾遺　[illegible]

拾遺上　[illegible]　景明(?)

万葉十　[illegible]

是は[illegible]

いはりともなし　此綱の語の事いはゆるしの所よりつゞきうつし

男衾二に衾道乎云々生跡毛無なく衾道云々生カ毛

無なく天離云々生刀毛無十一の巻に懃云々五情利乃生

戸嚢名寸十二の巻に萱草云々生跡元奈思なく空蟬之

云々生跡毛奈思なく白銅鏡云々生跡文無十九の巻に白

玉之云々伊家流等毛奈之これらくいつれもみな十九の巻な

る假字なるにあらずしてイケルトモナシと訓へし故に生りとも

なし訓るは誤り也生る刀とは利心心利なるの利にて生る利

心をなく空になるよしなされは刀はこゝにたちのトにはあらねは

これによりて伊家流等といへるなりなし又これをもあれはイケリ

トモなしといふにてさらるまりなる又刀の字なるはこれをとれト

事は用ひざる假字へこれらをもてほへ假字つらひの疎なり

し事又綱つとめのみならりなるはじめしるをおるへし然るを

なるにイケリトモナシと訓るはこれらのことをためなくこれをとも

くん得ざるならず事にて玉勝間十三の五丁まいへり

混雑いて表鏡の巻に見えたる通とはゐぬ君にまかれて羨我よるらんあし志られ

いひらも思ふるならいといふ恙此綱の語いひしのかにいふ

うたがふへし

拾遺集　身まうへてあへなく妻を恨むいかにら路の妻も長者あれ

続拾ノ上　思ひしに衾つれなき命かいかにら路にこのことあらは山路の衣

新後拾ノ上　ちらへていかにら路の妻ことさら拾らぬさきに妻を数ゐめる衣肉作

池をせる

於イ氏名
尾張來　池をほるにあつむる水のあふれいづるその口よりあまる　飯を開山　あふる處也

池見草　萬傳鈔　蓮の異名

玉葉集　みつる花やとまらん池の蓮葉に波にめぐりてすゑもかはらぬ

いはゐ　行通ふ道にいるゝは守ともいはで争なく行通ふいはく

つきまくりくり

万葉第一
六帖　川の水上つゝ川にしめるよるをいたつてあくるよむしかく流れる
まくら身にまく心ゆかぬきよにいづるい

万葉第十六
三条　みかねる波もくしくたいてよむ人にはしつれもあく開ハはいふ　金村

いはし　根たへしとあかし　古事紀香ろ山の五百へまさき

いはゐしにはしてあり

万葉第十八
六帖　去年の春いはひて植し我宿の若木乃梅ハ花咲にけり　於イ集には植ましてとあり

いはきはつり　いは發語にて　はきは淺りと

万葉第十八
十六帖　玉巻のいはひもゆるも我なきにいきつらむ枕はいはき淺　隠れ

日十九
古今　人やらんとみせぬ淺にかねてあめまちいはいはきめぐれい　あめの浦まで

日本
古今　淺茅の色わきて道を織らひ淺きけりてあらめ我ちるまで　よろし

いはきわすられね　一杯すくよあめり　いはきわすれぬ　いはきわすられぬあとにいけり

古今集
巻之　年をつれて月をへてとなり白まつおきてしまるい　いはきかれは無いらぬ

いはき　俗にいはくさあくとの子にも此の發語之いはて代てはつる

むかしの詠しききくるらんかくして　思ふはハトリヤとかゝる

故りけり日本紀不知を取りなり　いはあとるへるに同し　古意に淺濁

通ふして用に俗にトウシヤウまたドウジヤ　ヤラの言なく發語文

まいはきつくいはきかせらるへあく云いはもは我トモロトモニ行玉ヘト云

事也日本紀万葉集に不知とよめり人はいさ心もしらずふるさとは花
ぞ昔の香ににほひける又いさしら川いさしらぬ
ありつるは是は皆ことに通へり其の義ことなり統類に古
今集に犬上のとこの山なるいさや川いさとこたへよ我名もらすな
といへるいさはいさは不知の辞。去来等を書て事のさまさまあるべき
みちびく類を云也いさ是なりてあるはねをもつてさそふにすゝむ
をいざなむとしても是なりいざとよまる哥せるへとさそふことなる
言也とみえたり。サレバトウアルカ之是はイザ清(スム)音也此イサは伊邪那伎
神。伊邪那美神のイサも同じ言にて神代紀口訣に伊弉諾(イサハノナナ)者誘
語(フコトハ)と云り信に此の二柱の神遣合(ミトノマクハヒ)して国土を生成さんと互に
誘ひ催しあへる義にて伊邪那之伎伊邪那之美と負せ奉るな

るべし之(ノ)を奈といふる例あまたあり一ナコ手末(タナスヱ)足末(アナスヱ)なとの
奈則ち是なり男神に伎といひ女神に美といふは神魯
伎神魯美命是也と古史傳二巻にみえたり
古今集羇旅 名にしおはゞいざ言とはん都鳥我思ふ人はありやなしやと 業平
同上巻上 人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける 貫之
万葉集一 いざ子どもはやく日本へ大伴のみつの浜松まちこひぬらん 山上憶良
古今短句 まかりまかり出されこれは是よいもあさまらせり 紫郷
万葉集三 いざ子どもやまとへはやも志ら菅の同在は榛原手折て己居
あせそあるとよめり子等(コトモ)は諸人をさそふことなる
類之雅子(アカコ)を云にあらずいざといふてさそふ事にいへるはさ
文字得る之不知(イサ)又いさといふの意はなくこそあれへり

いさなみ又　いさやさは新撰字鏡にいさゝかの意とみの意にあるへく
何かはとくていさらはいさせくとはそふんいさゝらはいさかはいさ
みな知んなとよられもはそのゆゑにく或はいさせくとてさるはまた
人をきて我心をはそへのをもよ見え侍り　俗に何カドラヤラ之
萬葉集　いはやまてみなくともなき事いさなから聞しもせぬとし
後撰恋　いさやまた人の心もしらなくにおくてもかくも袖のしら紙　よくもしらん
拾遺恋四　いさやまた恋てふこともしらなくにこやそなるらんいねかてにする　同上
此三首はいさまたの意也　古今雑の部にも出
新古今　同上　いさやまた月日のゆくもしらぬ身は花の春とも今日こそはみれ　源勝光
同上　知る人もなくてこゝにいさやまたいつの程にかなるらん
上のつ有は又の意也　日本紀に遣頭八咫烏召之時烏到其

営而鳴之曰天神子汝怡奘過怡奘過とあるイサワくもイサやく
ひきさそてさそむる意なるへし
いさせ　続紀詔詞に此事倶佐西止伊射奈尓布依而倶佐西止牟
事者許而云々倶の字は伊の誤なるへしといへりいさせいふこと
誘ふ詞也　萬葉十四にいはほをらたをそらまとひてさらうまれくも
あはきさせさめやいさせをとそにて此歌昔より解得ず四の句は
明日来せさらめや明日の日ありきさぬらは明日もいつるをといへる
形也　結句は少麻にとまくみて寝もいざあつく中昔の頃まで
人をいさなふにいざゝせなといひつる事あり　一首の意は女の麻
の業にて麻をとりみ房なる男の来てまくれんと催せるまて
今取さのゝ多く麻の身にも麻をとりまいりても有へし明日の日あさら

んはすそ明日の日もあれは麻は明日又はさゝらもちみなへこなよいふ
くは席にみて寝むいさはせなへこんくるえと同解三の廿七丁
まに篇なり
はさよらや　吾すて不知らふ意之いさゝとよ古今集にも
いらる
万葉十三ニ
ちゝみ　せきゞしれはやもとらよいさゝめとや思ほえてあるれ きこゆく
はさゝ　いさゝいはやうて石をとりて之拾遺集に東屋の作しあれは
とりの石めしみれはさゝみえ金葉集後拾遺の前に詳細に
前の歌をいせにおもひましける此石あるとりの石あらせとよつるは
とせはせなとはひろまでくてとかりかり細石あしくいさゝいは同意之 一シナ八サ よつま
れと日本紀前解上の卅七丁なれへり兼珠唐類作にまはせは

いさゝはもあらは皆同しさゝれ石也しちきとあるへし　万葉集にそ
名をしくまなる事へよめり後の前にまなきはあらへきされは
よみゝさゝは篇なり
日本紀
前　あきもるらぬあそろいさゝはあれや此あるなる　神功皇后
新古今　波尾のあらきもとのいさゝめもよ詠ても知は哀き　光俊
後拾遺 夜前の 白妙のいさこまじく天の原みちさしを遠し　後成
いさゝめのさゝれ石　磯のいさゝは後の前　黄なるは出世の源氏物語
寒きさゝめしさゝのさゝめいふさき藤の中へれの男にまささも不見
おあり云く
家集　みやこもみいさゝめのさゝれ石我君乃宝に位らえへみえし　光俊
いさゝめの山岩石となる　さゝれ石の巌と成るまて

天延元内
義孝家屏風 まつ人のまちらはしむる石はいさゝ成れはさそよらむ

いさゝかん 花さえよめりそめある意 俗よいふ今の事よ○チヨツ

トノイ二ロツイワツカノ二三○カリソメ二人

万葉第七 まさ枝つくる松人はいさゝめよめり俗よせんく仮りのめやい

同上十 いさゝめよ今もみゆらし秋萩の志あらむてあらんいも妻を

古今 離別 いさゝめよ時待まにそ日はへぬる心はせをは人はみえつゝ きのめのと

大和物語 いさゝめよ吹なるやいあらむへき世をは思しと君よあらぬ

万葉第十一 杜の名負へる君をいさゝめよ思ひ出つゝあいさゝつる無

いさゝか 些しの事也いりそめなる事のものいへり 日本紀よ軽小

聊等の字真名伝抄物等に簡略をよめり 素冠詩注よ聊ハ

猶且也とよめり 又聊不敢慱大之辞と注して又薄もよめり 十分あら

ぬ事を云ぬる意なりとへり 又苟をよむ 苟且草卒なり

と和訓栞よいへり いさゝなともいへり 字鏡ニ文よいへり

拾遺集四 菅家よいさゝかの尾の言つれて見ゆる槐の木の葉蕊

万葉十九 いさゝかよ思ひて出しを多胡の浦に咲る藤見て一夜へぬへし

いさゝめなくて

後京極家三十首 冬月よあらぬ秋風も吹ていさゝめなくとらん霜の手枕 定家

いさゝもあり 些しもありく

雪玉集 山鉄竹 冬なからはし山辰のまゝくへいさゝもあり山の桂竹

いさゝめ舟 帆ちいさき舟をいへり

袖花 ささつる波のまゝくたゆたふいさゝめ舟哀ちるとも 業平

いさゝ小川 真淵云いさゝ水いいさゝ小川いさゝ井なとをいて浅く

流るゝ水をいさゝかといふと兼好か徒然草にいへり小川は流に出す古今
顕昭か説にも見ゆ
夫木集 堰なせるいさゝ小川にせきとめて門田乃稲も水やまさらん 雅経
久安百首 名にしおはゞいさゝ小川の流れつゝ深くも人を思ひそめける 安藝
いさゝ村雨 さゝしはしはかりの雨をいふなり
新百首 家百首 嵐の葉も露をもてかくれける所まても いさゝ村竹 為家
いさゝ村竹 といふ発句にて少し許の竹をいさゝといふ事をいへりといし
しへることあるへし
新古今 宮近きいさゝ村竹風ふけは秋におとろく夏の夜の夢 公経
新続古今二 うきやよ又こゝろもせめて一夜はありしいさゝ村竹 法眼兼空
新続古今 深からぬ雪の宮ふかへに夜ふくるいさゝ村竹 同上

雪玉集 家隣竹 氏ちかきすみにしら雪ちるを見てふくへにいさゝ村竹
拾玉集 雪覆 雪のあしたより外の色もなし雪まの野へのいさゝ村竹
日次紀事 竹 色もふかきいさゝ村竹あをみても何のいろ香にうつしてそみる
万葉集十九 我宿のいさゝ村竹吹風の音のかそけき此夕かも
いさら井 水のすくなしある井をいふ涼 拾遺に見ゆ 今案 葉月集抄
手洗水をいさら水ともいひ又此作に我門のいさら小川のましみ
のましてそ君かよりきて清水和名抄にこころをとゝめて
為の後撰にこゝろめて書しあるへき然れは今も和名の
あしあらて堀水之よりて外にましてとくる
いさら井も涼井ありてあくる水のそこくあさき事を深くても
またりあさきさるへからんいへり又いさゝ小川の有無

花のつゆし
拾遺愚草員外 水無瀬殿 結ふ手にかくれもなをそたのむらんさん秋の夜もいさら井の月 のイ
源氏 薄雲巻 古人ハいかにかくて心あかさてたのもしきいさら井の水
壬生忠岑 せきとむる人もなかりしいさら井ハいさら井の水もとしも出てん
源氏松風 いさら井ハはやくの事も忘れしをもとのあるしや面かはりせる
いさら小川 いさゝ小川にあるへし又いさら井の所をもみへし いさゝ
小川ハ近江の地名なりともいふ
六帖 我門のいさら小川のほとりのはしにそこそ忍ふつ君にとりきとい 辛川ハ古和の名なり
拾遺愚草 又結ひとめたり我門のいさら小川にやとる秋風 慈鎮
同上樹陰 我門に植しも老るく柳かけいさら小川に又涼しかりき 同上
新千秋下 木のまよりいさら小川に光みちその流くもらぬ月 昭 源 卿
同上 夏月ハいさら小川を渡りてそこともみわかす すゝしかる 宮内卿
いさよひの門
亜槐集 義信 法の道はれしらんいさよひやいさよひに何はいかにも
いさよひの月 いさよふ月ハ山の端近きかいかにもいさよひて出し月の
なかその月をいかに出んとして出しさなるをもいつりてまて程
のさかなるのにをみるさきまちかねるをいひつり是ハ月出
てもいまた出し得すしてのあるをいへり いさよひの訓の解ハ古事記
卯二十九の十七丁にいさよひいつり又さゆらの所に委く
いさよひ
拾遺集 秋風にたなひく山の端をいさよひのあるる有明の月
同上 夢覚月山の端の雲をかけていさよひのある有明の月

ひさかたの月　日の光はひさかたにてらせり　其天に出せり　このよしの
ことをいふとそいへり

古今雑上　まてといふて行といふひさしおのつらをひさかたの月にまかせてみん　山家

続古今雑下　宮こにてなかめん人も山の端にひさかたの月をひとりや見ん　藤原家経

新千載雑上　はるかなる我世のことを思ひつゝひさかたの月をたのむ家　源仲正

新古今集雑上　ひさしくとよ岸の萩いろかはりてひさかたの月をまちかねつゝ

新拾遺　秋ふかみ行末の月の夜はひさかたの月のかけに鳴あかり　公蔭

同上雑上　冬枯はてぬる跡の岩もとにひさかたの月のかけて涼しき　信実

新葉雑上　住わふる世はあまの川のみなとにひさかたの月もみるらん　宗良親王

ひさかたの波

月清集上　ひさかたのあまのかはらの星合はひさかたの波に月をみるらん

新後拾恋四　我中は身をもつ橋とならはしよりひさかたの波をそよみて遠　藤原為家

拾遺哀傷　ひさかたのあまの桜花さきまさせ給ふ事はひさかたの波をえやはわたる

新古今雑中　天の河八十瀬の川の水上にひさかたの波のゆるゝなれとも　人丸

ひさかたの雲　紅葉はひさかたに　日本紀　其天の雲

新拾遺秋上　初瀬山をのへの鐘やひさかたの雲ゐに出る風の音　為家

新勅撰秋上　秋といへは嵐もさそふ山の端にひさかたの雲の色の衣　藤原忠経

いさりたく火　いさり火は常に夜たけり　万葉集十五　波の沖へま
とほしいさる火はあかしてともせやみしぬらんともありて　良行四眼の海の
日本紀兼方に　萬葉以下に君もあへやもいさなとりの海のよせる浪
を解に云　不知魚取（イサナトリ）海によせる発語　旧説勇魚取（イサナトリ）之といへり　万葉
にも勇魚（イサナ）鯨魚（イサナ）と書く　壹岐風土記にも鯨魚為伊佐（ス）とあれは旧説よ

りなるに似たれど万葉十二に鯨魚取(イサナトリ)淡海(アフミ)の海(ウミ)とあるはいかにと思
ひしも湖水にして鯨取といふべくもあらねば濱(ハヽ)云
を除くとも何なりとも鯨魚取とすべきのまゝやむを得ぬなり案るに
前説にイサリとスナトリと同語にてスナトリとイサナトリと通じて
同じとしたれば的説ともいふべし然ればイサナトリは漁(スナトリ)の古語にて万
葉などに鯨魚(イサナ)勇魚(イサナ)と書しは借字にて然ればイサナ取をも皆
約めてイサリともいふ前説に云イは発語の如しサナの反サえりはトリを省
きて云へるといふべくてイサリはあさりの反対にてイサは万葉四に不(イ)
知(サ)也(ヤ)川(カハ)なと書きて不知をいふ古言へアサはあはれなるなどにて
古の不知の反く水中(ウフ)に入居る魚の不可知を網して取或は釣して捕る哉
不知魚(イサナ)取ともいふべきなりイサリともいふ前説にスナトリもイサナトリのイ

をも略きてスナとサは通ふ例なれば同言ときこえたり又あさりは地上にま
あるを取にて詩の反対求食(アサル)鵝子(キス)あさり貝などいへる是也然らば
いさりとは湖水にしても海辺にしても漁するにはいふべきを
いへる発語といふべしといへり

続千 恋五　恨みてもなほたのまれぬあま乙女いさりする火(に)燃えはてぬれば　法皇

夫木千五百番 寄漁火　あま乙女いさりする火のほのかにて見えし人こそ恋しかりけれ　[illegible]

新古今集 隅溶舟　ほのかなる浦の苫にもいさりたくあまの篝の影の[illegible]

万葉十七　あま乙女いさりたく火のおほゝしくつぬの松原おもほゆるかも

いさり[illegible]袖

新古今 上　黒髪あまの袖の浦風のさゆるにていさりにも[illegible]　[illegible]

いさり舟

漁燒火 みるめかるあまのすみかの篝火はいさり火ならでおもひこがれてぞふる 御撰 摂政

續後撰 十二 よる我に篝火ならて焼いさり火なに深て思ひの忘れてぞなる 常磐井入道

宝治二年百首 海人やあさくなる篝火いさり舟沖の火にほのかなる出けり 衣笠内大臣

家集せる旅枕のたとへ 波よるにてる火いさり火や舟のみえつるはいさりせぬはゆめるぞ見けり 大納言通

いさり釣 ゆめり いさりは網釣のこのまんといつりは釣をいふなり

万葉集 十七 大王に仕へまつるに遠近にいさり釣をせきたくもおもしろきかなとも 云々

いさとき 寝覚 枕 遠近に云 今集いさは寝くねさときをいさとし

とりよきもし 寝真利 きるにも七の三十オまいつるこの

り心利 ○ 利心 あさの利と同し 万葉集十二にまさとらなの聡神

ともきけり月の光めでいさくあらぬをいのさとしさくらつへ 徐に月

さるき人よはさき人あてもいへり 花咲る 嘩花ともかき いの字釈

せられぬ事いくさんいへり

於イ 夕紀上 紀にはいさ床にいさてはよ燧をいさく冬の此の

新古今 篠きさをいへあくて数あらぬみつの桜はあひき宗于朝臣

閑院左大臣 よもひらはくらやめぬ 宗于朝臣

六帖 月みるれいいさなくはあ衣ぬきまし思いは明ぬとよまいぞまのさくく

いさめのつみ いさめは日本紀に制ノ字万葉集に禁字をよめり

諫諍ともよめり又折檻をも云

堀川百首 諫鼓 高きいさめのつみともあれて苔も乱れに事なつけり 左京大夫顕輔

いさらし

和名抄 うつほぬきの事もいさやいてのかさ

いさめの杖 昆竹集に云 唐土に伯瑜といへる人母にうたれて泣

を母はかりて日比は浅させてわか庭はいふまでもなく日比いふことを
て痛(イタミ)を覚しら母のちゝかゝるをもいさめてよりて
浅く恭しくいさめは諫(カン)言(ケン)をいへつり後者いまさえあつらむて
械またちゝ母のいさめけれ者に後者ありいさめは俗にフショウチ
。セイタウ之
親のいさめ　　滅はちむる　　道をいさむる　　事をいさむる
あそをいさむる　　いさ後者その為くに出せり
いさり火に思ひなる
遠去八 照もせて運もなくぬいさり大いに夜の浦に何そあるらん [illegible]
いさよひの鏡
久安百首 いさよひの鏡にまとりてうみもそらく照(?)月 [illegible]

いはふる　いは発語にていふるはちかはれて遊さるるなりとぞ
萬葉一 あきつはにあらはれ山の岩まにいふるまて道のこまいさるまてに云々
いさつきめられる　　萬葉十四 に ゆちらのかくるまはくあくて云々神
日本紀 浪穂之上 云々 其下に秀起此云左岐陀豆屡と
ありし此豆は豆の誤れるなるべし　されはいは発語にてさきたつる
なる浪のよるく数々ちめらるるなりとぞ
萬葉十六 今はまあきらめやも白浪のいさき廻れる住の江の浜 来和 [illegible]
いさをし　いさをし 俗にテカラ也 志は勝(?)語にていさをと同し
勇長の男之伴の緒の名にしへりいさをしの事は萬(ヨ)一数(イサミ)にも
出て蹤朝撰に記せりいさをしの名会ふへし勇く旅く志さ
くれ知り

延喜六年竟宴哥 いさをしくおもしき道のおもひはなてそ我身も君にかよふなりけり

二三の句乃間ニ道臣をこといさをとあり。書紀 汝忠而且勇加能有導之功是以改汝名為道臣とあり道臣の命の名は日臣命といへり いさをしくの訓も此より出たり 忠行云志は勲績にあらん 志さして說

績く悪しく悪しきと同格なり

いさち いさちの字に掛あり 神代紀に啼泣とありて いさちと

よみて意なり

万葉十三 ともの頭めぐる我も いさご出みへうきしゆいふく

いさご 萬葉集 いさごは風土記にいふ 細は石とも云 らしき

語 身大角 なりといへり

石神

為忠百首 恋 あふことをこそ石神にいのりねがふ恋も夜に志られぬ 為業

地下おほにかゞみ恋 めぐみはありあらはるゝ我石神乃ちかひにしてめでて祈るかな 為盛

同上 あふことをまへとつれなき石神にかけてもなきをいはでまた

金葉恋 あふことは我から石神につれなきよ我恋のくちはてぬるかな 藤原某

和訓栞 出雲風土記に云石神とみゆ尾張にては積田某の神を謂て石神といふ 仁明紀に陸奥国玉造温泉石神 式 常陸国鹿嶋郡大洗磯前(サキ)薬師社の事文徳実録に委しく見えたり 又能登国羽咋郡大穴持像石神社 又伊勢国多気郡の石神社を今しやく大神とよぶ 小社(ヤシロ)村の山中にある宮

は百丈餘の奇岩あり 因幡国神社の石の事は藤原某

国立公文書館
National Archives of Japan

にみえ尾州城東物部ノ神社も一大石をもて主とし亦
播州石の宝殿あり又姫社の神石の事風土記に見え捜
神記豫章の載氏か女一婦を一石に祈て貸本の庭祠を建
て神として祭る載侯祠と云石をも見え真臘風土記にも
西の宮銀は一塊石を主として祭る中西社標中の石の如し
ともいへり又中山伝信録に以石為神澆酒祈福ともみえ
たり

石占　郎石神之埃嚢鈔に幸ノ神の祠に丸石をそなへて石の
軽重をもて事の吉凶を卜せる事をいへり今紀州那賀郡近き
山村の天満天神の祠に此石あり世に霊異を称せりと和
訓栞にみへたり又畳解三の下廿九丁に石うらは石を蹈て

占ふ事にて景行紀柏峡大野に宿りたまふ其野の石を指て稲葉
みあかしに羣なとのたまひて蹴させ給に柏の如く大虚に上
りぬ これを踏石といふとあり
万葉十三長哥　名にし負ふ石にもあらで我宿にみむ事をなそ　桃ノ丹生世
蓮長八新倉　名のよし石占もちてあとに一に思ひしおもひ　ひらき

石あふり　石の事也あそぶといふを松の葉波葉四の十八丁に
をはふき石をとりてのまて何をいふものは昔も今もちくさいもちゐ
栄花物語月宴の巻に石あふりせさせなどいへる石あふり
は今の世に石なげといふ是は小児のしわさにて今はやらぬもの也しかし
新撰六帖　笛川の石なとりつくえ　なとりなく　せなかの　住吉の
於道ノ柴　石なとりの石めされ三十一をつみてひくつまびく

文字なくてさしてまゐらせける
　苔むせばむかしもえんざれ石は数をかぞふる哉　よろづ代ぞ　さゝれ
一条右相家歌合
二番左
石名取
左　数まさるかずよむかしつる石なれば君にめぐりあふ代ぞ　きこゆる
右　底は石のあらはれて行水ぞせはきさゐのおかしうる恋しく成り
右　はまさゝし石さつむ石は数いふ君か千年のこしきたり
右　かちまけを何さりぬき主のとこるまでのかきさて人はみよ
左　なるくふりむかしやれ長きまはまほの中にさいたの歌の子
右　白波の音なよいのちもあれと石の花まては神の恵みるらし
左　君か代の数にとりきはれ石のちらみ山のまへあれる哉
右　天地のかきりは数しおなしに石をとりてあきつかむのもあるかな

左　いにしへの事もやなりてみなるもあらたしき残るよんよれ
右　高きを見るくのせい　逢へ
石なとりのうた　石の事をかんへりおさなきこ子のまてはやて石
なとゝく和訓栞には石投の事とかへり海にも石なとりのもみ
えたり和名抄に擲石と見ゆ金葉集に石なとりの石あは
せらる事を世はものかたりえたり法隆寺の事年に石
なとりの名ありとんかへり日本紀陸奥門集女は雅君と申ゑはせし時
石なとりの石めしをとなりさゑにくらきの恋ける庵の石名
あはせたりあらかりゆらさへてとて
また
新撰集石なとりのみなるかな身にに送る月なるらもりや西行上人
石なく
　衽中抄十九巻陸奥のおくにつぼの石ふみあり日本の

ちてこゝにくり田村将軍征夷之時弓のはずにて石の面に日本
の中央のよしを書つけられたれば石ぶみといふ也　信家作
泥中に石の面長サ四五尺許ある上文字有けり昔にたつ
おとにきゝ何り猶つぼの石の文字さへ不会せん哉なし
袖中抄　石ぶみやけふの世にも布せばみにあひても猶あかぬ哉
新拾集遣
情ある人　石ぶみやつかろの遠にありときくえぞ世の中を思ひはなれぬ　清輔

石の亀

新撰字鏡に𪚲(イシカメ)をよみ和名抄に秦亀(イシカメ)をいしかめとよめり
慶長八年
新編　ちしつぶ石の亀の世にあるものを遠つて無ければ
後撰判にも云石亀万葉集にもみえず見及ばず筆また出
わのうあく作る文撰にみえぬはなく思ひ夏身鍬縁水循
奥於舟尊組以弁護之翁雛定石亀之年仍不知判云々

とは見ゆれ

石の中の火

朗詠に石火光中寄此身　石火とて石の中に
火あるを思ひによせてよめりと萬葉集講解五の千九十一ふ
云川石をうつ火政に出会せんべし　又岩木の中の思ひらん
みな合せみあし
萬葉集　義電は見えても見えず山川の岩うつ波の中は思ひを
眼にみる火
右大臣家歌合　ちゆかやみるともあき石の火は光の内によりる世なれば
草根集　中に有る思ひを積打出て岩につもしの焦きるらん　正徹
同上　積しあれば打つ岩中の思ひを打出て　同上
新千載
恋一　浦遠く波のうち寄る石の中に思ひと寄るや　行助
千五百番
歌合　石の中に燃ゆを上にて世の中の業思ひ　越前

続古今 恋三　ちぎれ石はつの国人をまつの江にもえしへにきかれぬるかな　読人不知

久安百首　ちぎれ石の津の国をかふりて打出ぬさきにさそはるらん　上西門院兵衛

夫木集 祝恋　打出はちぎりもてあらあら石は火の光はあらはれてさらせん

石の鳥居

堀河百首 御製　あひかつき石の鳥居の二柱ふたりの神も絶井さそせく　様之

石の縄

堀河百首 恋　いつまでとたえん我身をとらへきても猶引かぬる石はし　忠定

石のむろ

堀河百首 恋　我君はひたちの山の石はむろそはしらぬまで契りけむ　基頼

石井

石井つゝとも

万葉十二　ちはやぶる神にはえ見ぬ我宿は石井の水にぬるまはかりけり　作者

家集　ひさぎ生る片山かげの石井つゝふところにても涼しかりけり　俊頼

新撰六帖 家隆　跡もなくあらぬ所もみなえて石井の水にたえるうき世　

家集　岩代の松かねの石井つゝるるかげを文字てうつすかな　寂然

夫木 春雨中　幾年をみし紫のたねを人に手まて石井はなにとかくれん

石そゝき

夫木集 春雨中　木のもとちる花の都の庭の面はその跡とみる石そゝき哉

山家集　聖の手ならてはなき君か住へる石そゝぎのあと

家集 おなじ　葉かけある都の跡とてや石そゝぎの中を見ありつる　仲正

石たゝみ

秋霞をとよめり

続古 神祇　三輪の神さる山の石たゝみのありとてもわか祈るかな　前大政大臣

金葉 雑上　石たゝみありけるものを君なくは心も遠しきと思はぬる哉　前斎宮ちかし

日よ返し　居ほしおもふ事もこゝろゆかし　衣にみな夜袖よ衣ら店によ侍る

石井の蛙　井の中乃蛙のおもふくし

新六帖　年をへて底井のうちに住む蛙つらなくゆめなる我身なりけり　家良

以字焼字

拾玉集　六　世なりけよ我ハの継も事をいはせむ以字焼字法乃教示

石の床　仙人の経家をいへり

万葉　おのづから幾千年まで古りぬらん石乃ゆか[illegible]河の山風　為家

仿人現　石のゆか苔の莚の[illegible]ちりハ[illegible]ちりぬらし　基俊

拾イ　山人の[illegible]まて幾よの石乃床[illegible]白むく

石の枕

夫木集　[illegible]の床にかされる[illegible]石の枕も[illegible]　よみ人しらす

石こゝろ

落縁　我こゝぬまゝの谷川ゆく水に石にもたれおくやまの[illegible]　[illegible]西行

山家集　ぬまもふ池に[illegible]める[illegible]石[illegible]なかる[illegible]も[illegible]

永久四年　石[illegible]はふる人のいさ[illegible]みえをとる[illegible]　後鳥羽

石のある所　昔貞婦あり其男遠方へ行たる夫を待[illegible]

武昌北山のなりて見送りける[illegible]化して石となれる[illegible]又松浦

佐よ姫の[illegible]も[illegible]　和訓栞に云潭氏化書に虎目光

化石燧星化石脂化伏苓と[illegible]

夫木集　おもひつ[illegible]人を[illegible]石に我身[illegible]　よみ人しらす

[illegible]今　遠川に[illegible]我身も石[illegible]　親隆

夫木集　石[illegible]我[illegible]　能因法師

続後撰 三条右大臣恋 あふことはかたきにありしさゞれ石の我が身ひとつの石となりなん 山家集
石ゐつれも一夜まの石の上に年をよみ給ひけり

石のおりゐて置とある

慶長八年 大かたに河への石への書りつゝ置とあるとも君か代 衣笠内大臣
新後撰 君が代は石をめぐらせ川の石の書りて世に置とある世の春 道経
芸術集ニ云 川石為辰星ト 神功皇后の新羅を平らげ
あまりし時られ人の誓を言ありし也けり

石川

石のある訓を云あるべし 古事記に廿二の廿五丁に石川
又和名抄に河内国石川郡とありて 石川郡長氏姓の事
くはしくしつれどもいまだ見えず之
夫木 読人しらず 流れ出る谷の石川月し世をとられと遠き山道 石あふ

石のみまし 常陸国鹿島社の説に要石といふ山宮と
号ハ大神天降りましし時ニ此石ニ座ましませり 則チ石は御
座といふとありて 左の本に綱を付て引き動かし
見しかども動かされざりけり 此宮の事は玉とくらべ四の奥にあらば
しるく見えけり

家集 夫木集 松のねのねをさへつゝみてあるこそ山のおくの石のみましなれ 光俊

石の橋 いにしへ橋の石合せてへし
夫木集 石の橋松の柱にさみだれて花を道にしへ出てむかし経平
同上 雲の上の雨にさぬれて山寺に紅葉あらはある時の石とし 雅経
雪玉集 続千載 庭の西は山ちかみ冬て石の橋やりて水ぐみて萌えさすなり

和名抄ニ石杠をよみけり 聚石為渡とよせり 新撰字鏡

に礒又礪なともよめり 西行上人にいはしると詠めり 石橋なともみゆ
滝津瀬に石を並へ渡すをいふにや 又間なく流つ
らんやしあるとも云へり 石浪に書かれし石並は義あるへし 又
いはしいともあらくともよめり 新勅撰にみえたり

石に七ひろ

万葉 読人不知 七ひろの石よりも猶つれなきはひらかれぬ人の心なりけり 読人不知

石に苔の縁

東撰 君か代の石に苔のむすまてもつきせぬ 逢房

延長八年 君か代はさゝれ石の苔むすまての 紀貫之

石にうつみて旅

新六帖 我かたらへは旅にある谷石をつみおける人の旅 信実

石にこもる

新六帖 こもり石の波の下にやかくれなむあきはての舟心して行 信実

石にくたく

六百番歌合 いせの海乃塩せにくたくさゝれ石はくたけて後も岩ほとやなる 家隆

隠岐 沖の石の波にさらされふせあられてたえぬよをそ経る 家隆

石の岩かとある

資子内親王家歌合 さゝれ石の岩かとあるの心合せへし

石をよるとしの数

歌合 君か代の数にとりつゝさゝれ石のいはほとなれる よみ人不知

長秋 五十首 沖の浪のあらいの瀬にさゝれ石君かよはひの数にとるへき 釈阿

永二四年 君か代の数にとらん松のかける梅の下に石をかはしあ 源為忠

石たらひ水の鏡

夫木抄　石たらひ水の影はあらはにみむせかんはこゝろよ　後九条内大臣

夫木抄　今の世はのかれぬ人のかれへ石たらひ水乃末もたえぬ　中納言

石手より落

建長七年 奥州山家　筆へぬる岩ほ出る頭のせより流る石も苔青して　定家

石樋

夫木抄　まきせつる石ひ乃家のゝ流れんは岩ほへもなし　衣笠内大臣

石舟

拾遺集に云　螢の頭より出るとて舟のうちられは石を取

いれてちきこ出るをらりふ又あまのいもの舟の石拾合はつし

夫木集　松尾のまつせてゆくを出るへ硯石も浦のあまは石よ

石硯

亀山 ちゝなき　水さまに住かとみて石くゝり鮎の[illegible]　為相卿

石ふし　鰒をよみたり玉勝間七の廿七丁に云或人云為頼集

いしふしと云魚は今の世にたに[illegible]しまた[illegible]

川桂川あたりに有らしく[illegible]をのかよひぬるもの[illegible]

石のかけを頼ふて[illegible]石ふしとりは[illegible]

[illegible]沖へゆきつ手[illegible]

つ[illegible]男解[illegible]藻[illegible]一つ[illegible]

鮎[illegible]源氏[illegible]石[illegible]

夫木 家集　[illegible]あらぬ[illegible]淵[illegible]のしめる石[illegible]　源仲正

石井の水の鏡

顕昭　[illegible]はし石井の[illegible]鏡[illegible]

石の帯　和名抄に紀伊石帯越石帯なとみえ又有文无文
玉馬脳犀角の品あり顕文隠文といふ事あり隠文ハ今
云毛彫あり顕文ハ帯の彫あるをいへり○抄に又白玉帯波斯
馬脳帯班犀帯烏犀帯斑豆帯等あり白詩に通天
白犀帯なとみへり又其骨本有純方九鞆䥫上等之名とも云

古今集家帯しを　巡りあふまでとハ石の帯のうしろやすくもいんいさ逃を思

新六帖　思ひきや我身にあてある石の帯のうしろせてよ人をかゐてえ出は

石竹　此ハセキジクと字音によぶる事也

永弘るを　石竹の毛様家によりてふたしよ也竹をまがせよ出ハ出居

石をうつ火　上の石の中の火乃品合せみつし岩木の中の思ひ
の品をともつたへし

古秋俳藻上　石をうつ光のうちにようそらあるみな世をすてにそ

石つ石　岩のつるハ昔かにより琥の斎出せり

新撰神經　榊をて宮の石つ石つゝあらし君をそて祈るらむれ　葉相迦

石の立道

神よ都を都ならぬハ岩川乃川原を都ハ清ようある石の立道よをもとかく何　猿俗忠

石のきつけもし

都の道ろを　西乃国もまつの西ろゐまさる以西乃京門の石はきつけ猪　俗撰て

かしこゆとうる

続古今集七種　心さし深きみちよつこなあてかしこゆときとすてあらねは　神室せり

かしきなり　以ハ発頭甚きをそはハ折からゆゑゐとはふへるとれ

を盤に木の枝葉を折なしし也紀葉盤八枚○葉盤

此云ヒラケと和名抄にみえたり或書云 十一月辰日宴會其飲器
参議以上朱漆椀五位以上葉椀 和名抄クボテ 又漢語
抄云葉手 ヒラテ なとゝみゆ 構まてをカシハテともいへり是は 宮
長云布折は 折布を上げて 祝ひ侍るとそれも 柏酒のこと葉は
志くとも御事ゆかりあれは 布八祝ひたまふらんといへり 仁徳
天皇の御哥 ま山志ろきさま以志のえりやまいしゆくあをしつま
まいしきあをちくらもされは退路ゆる志まてをは志き波の下ま
いなりけり
万葉集十九 さかつきに遠き流れを汲ましきをいはし酒呑こうて 此
石を玉ゆしらと云 玉色もの玉 石すき瀬 クチスヽク スヽキもせ 故ス流す枕とも書なり
巌をはなれ石よりへせて 鶏のなる石 沖の石 やよしの石

雲の石ふく さゝらの石 さゝれ石 はら石 はなれ石の穴
はなれ石の岩ねくくゝる はなれ石をさゝへく はなれ石ふくとゞまる
石をはなりと云事 はなれ石 さゝくゝ石 白石のうへ
白石 石をんもとゝ めしさえ又いふめりと云事 瀬に石せる
谷石 玉をおきて石をそらへ 千引の石 つれの石ふく
常磐の石 七尋の石 石をさきはなち石 のちの石
さゞれ石 大井の石 淵の石 まつ山の石 水の石をそらへ
みつれ碁の石 見ゆる石の硯 升せさの石 岩に立矢
いさゝき そゝきの石又うらさゝきの石みに混せり 以上和哥其外に出せり
いそゆしらさ いつゝしと同言之いつゝしもと稜威を云言なるを稀
しくそ御言 玉をあれりとそ

続後紀 寿詞 世中のいさともさたをもへうけ給り申しとてまつる云て
同解廿一年ともいふし大祓の詞よいつの千別(チワキ)に千別てこあるい
つ手て事とい稜威を云言あるを聞しいさて下の如き言葉とな
り祝詞よいやし治世茂穂(イカシホ)なしいつるい大御世を茂め稲穂を
不免さるよていもしい別なるかやしの畏言入ソシとカシ也又
同言よて助言将りていなり

五十鈴川まちの岩ね
新古今 祝部成仲 いすゝ川空やまたきに秋の声下つ岩ねの松の尾 大中臣明親
いすゝ川清れ月 六月の岩根の時よ秋の末てゆけいすゝ川流れ
月よ成めるかりけて本近淀まて子孫源暮月と共り成初等
二の奏ならてもし

五十鈴川よ宮柱
新古今 神祇 神風や五十鈴の川の宮柱幾千代すめとたてはしめけん 俊成
五十鈴川よ玉ちらし
拾玉集 五 考られぬきいすゝ河波よ玉ちりて絶せぬ道をしるらん
伊勢人のひらうて
堀川院百首 伊勢人ハひかことをそよもとほす和なりけるよこまはたれ 忠房朝臣
同上 伊勢人ハひかこと川つ絹あり五十鈴川のつゝちらい 忠盛
同上 伊勢人ハひかことよめりはさて業なりて紫かりれ 西行法師
いせつらい
夫木 新古 勅なれハなを祈るらんいせつらい世ハ事なれ老を祈そ 光俊
いせきものあま 伊勢の海よさとも延喜なり

新古今秋
雑哥
めくしらぬいせをのあまのけふそて衣秋なりけりと濡るらん よみ人しらす
後撰恋五 みるめかるかたやいつくそ(?)しれぬらし涙にはいせをのあまのぬれきぬ わかなみたらん
源氏賢木 すゝか山いせをのあまのすて衣しほなれたりと人やみるらん 伊勢御息所
同返し うきめかるいせをのあまをおもひやれもしほたるてふすまのうらにて
千載雑二 ほのかなるいせをのあまの釣竿のなからんさとはいつくめかるよしもかな 寂蓮
新千載世五 なかなかにいせをのあまの釣竿のなきたよあらぬぬるゝ袖かな 後京極摂政

いせ舟

新六帖 なにしらぬ湊あらきにこきくる伊勢舟 光俊

いせをの宮

名寄 月みもしらぬたちまん(?)川いせをの宮に(?)遠 為家

いせの濱荻

ちかひ荻のなかにも神風の伊勢の濱荻なかに(?) 顕紀

あしをよしといふは俊頼の住吉社の哥合を判してまての
あつる言葉にいつまの人の言葉なるよし又顕昭が顕注法師
を難もちといへるをかうまかしといひなりしれはよしといふ也まよ
またなるくは哥にみえ侍るなれや真劇云遠江あたりより東
の方にては今もよしとのみいへり又難波の芦は伊勢の浜荻
きこえて此哥を同し筆とよみたるは浜の縁のことなりて一万葉の
哥を詠しけるにいへりなとのまもいへり此らをさきあしとにてとかく
いふしもといふ免ろにいひて同しかたらぬを以ていれは申と判
ある拠也。神祇伯顕仲判住吉哥合にみきはなるあしをよま
うら浦の荻はよしとてみゆるよ此の浦人は住吉社の哥合證なり
神尾住吉(?)はちまつたきさと芦のふれと難波なりけり

あしとのゝいふはあつまのことはにはよしとのゝいふなる

拾玉集　うきことをはらふ神にそ祈る神風やいせの濱荻しけくうらなく

後拾遺 旅　かりそめにいせの濱荻折しきて煙遠しみ月をみるかな　基俊

万葉第四 神中納言新古今　神風やいせの濱荻折ふせて旅ねやすらんあらき濱辺に

此哥異解多しは是は濱に生たる荻なりといふ説有

とんへ見へり

いせをの蜑　蜑の字おなしくしかり

菊合　鼻気出あれもあらしも鈴か山いせをの蜑のかりやかまし　定家

いそあま

万葉　さて刺繍の結ひつめる磯あまのなくらむ時をぬらす袖

いそのあまめつらしいはあまし　いそのよするよしは常によ見なり　衣上

きこゆる君か地名の記上にいるの事は古傳十八の五十丁にくはし

しくく見へり

磯海

於天暦御時歌合　春くれはまつてもちみ着衣上めつらしむあきや山田はいぬとも見え

磯門

風吹はあら磯海をゆきかひて波のまにまになるあまの釣舟

磯間

磯の辺あまりくよめり磯間の浦とも

新古今　一波かゝる磯間にあまよりなんなれもみるめに袖はぬるゝ

眺めにて浦ならぬあまもし志摩の浦にそまし廉の事意見

夫木 秋　あれのあはれもそまし浦にある袖くらくなりて行らん

冬　冬のよは旅居をみかゝ磯のいそまの浦にかなる浪はり　津守

新続古今　うき中をうみて祈らん神路やいそまの浦の波の音かな　一品親王

続拾遺二 煙たつ名にしほやく(?)浦のせよしほまの浦のあまのたく(?)ふる火 新続
宗良親王 みるめあさき磯まに見ゆる出し波も月やならむ浦風
六百番歌合 みるめあさき磯まのなれよる波の音はかりも袖ぬらせとや 定家

磯屋形

屋形の事は舟屋形笠屋形其の屋形様屋形ある
ところに記せり
正治百首 春 いそやく煙は霞よそにきこえ火のめきふるあまのたく火 家長
為忠家初度百首 あれはてゝ人もあさき磯やにつゝよりあまのしほたれぬらん 俊恵法師

磯のちへ

ちへの所に注せり
為忠家百首 寄海 あまつ(?)お磯のちへまんせよとまらぬさまたける家毎 為盛

磯のへち

新古今集羇旅の部 行尊大僧正の歌に 紀の国名草の
へちといへる所は紀の国熊野に近き所にて牟婁郡田辺より海辺
を経て熊野まて出る道あり 是なるへし 此道伊勢まてつゝけり
古く磯つたひにて紀路ある所をいはそのへちといふなるへし
今の俗にも大辺路(オホヘチ)といひて行尊僧正の熊野へ参詣せられ
しも此道なれと集にもしるせり 又西行法師の山家集
にもいせのへちは紀路の俗云々といへるも此道のことなるへしと 玉勝
間九の巻に云
為忠家初度百首 ちる花や磯のへちなる山ならし 吉野の夜のうきねなるらん 為業

いそちのみ井

五十路京の井の事は玉勝間三の十丁にもしるし
けり 五十路を今いそちといへれと古へは五十をいとよめる
例あれはいしのみゐと云へり 伊勢国鈴鹿郡山辺村と云ふ
所にありと云へり

万葉集人丸
春　おのつからいそらしけれ山やまもとらんおれる錦を春の山風　信実朝臣

万葉集十四
の夏の歌　おのつからあれる錦をちれる山もとよあらきをしのふ

いそねのもし

建長三
人名不知　よるまよふやまみなかんあつまちれいそねの松子月残る　さゆ　源孫実清

いそまの跡　石間の跡之

亀山院御
今河月　せきとめぬいそまの跡の山河のこる千代の月は澄み　実

判云　万葉集にいそまのかたさの山川とよめるはいそあらいと云々　此は三句
つきてやねらん云々　いそまゆ云　石間従と　いへるなるへし

磯際

六百番歌合
寄人　志ある　あら磯際の岩ほ松終につれなき色も　顕昭

現在六帖　風吹はとちらの磯際の浜も山も　為家

磯菜　蔵仲云　磯邊にあるなる菜之　顕昭云　磯によるなる若和布なとの海藻なり　万葉集ニ　磯邊に生ふる菜みなれいそ
しつあまはおよるとよめり

新古今
羈中　たのむら磯菜つむらん旅衣にしの浦の潮にぬれて　為家之

夫木
雑門　磯菜つむあまのあまへかえらん不知ものせき袖　顕昭

撰女集
海辺菜　波あらき磯際に海人は磯あへてあまへつまてなにつむ

磯あへて

順氏集
春　磯のをはまうきあまいそあへてなにめかれにて　あまも引らん

磯まくら

新続集
冬　清き山もて春よあるきに磯まくら　夢かにも出波に磯まくらの　寒波

新千載
冬　風はや波も岩ねをあるきいそまくらしきなく鳴之　宗尊親王

以てしるへし

新続古今 知家 心あらしの上にたえぬ浪の音に袖のみなとやよるへさためむ

磯の中道

新六帖 世の中の磯の中道しらねとも我身ひとつはわたりかねつる 衣笠内大臣

磯の洲崎

夫木 秋萩に心とめたる小男鹿の鳴くこゑもせぬ磯の洲崎に 耕雲

磯屋 あまのすむとよめり

家集 何まの須磨浦の磯屋にたてる波より打よせて衣うつ 拾遺

磯の苫屋 あまのすむとよめり

家集 せきとむる磯の苫屋の波の音の晴れぬ夜 家隆

磯の岩屋

夫木 みなかみの磯の岩屋に鏡をかけて見る [illegible] 為家

磯もとゝろによる波

万葉 世の海の磯もとゝろによする波たえす人に恋ふる毎に 人麿

磯もとゆるかす波 石根もゆるかすとよめりて波の立つをいふなり

万葉七 大海の磯もとゆすりたつ波のよらんと思へる浜の清けく 人麿

みなと二 おほみ宗磯もとゆすりたつ波のゆたかなる衣の袖のよるよる 家長

家集 なみなみの磯の波よるしきなみの磯もとゆすりある鳴る

磯回

磯のめくりをいへり 浦回磯回の回いふうまいそまと訓ず 浦也磯也とよめるは誤なり 是等をうといへる

古今集よりもあまのすむさとといへり

嵯峨 二条家
時鳥鳴しき山の磯ぞひにこゑもなし常はいづこぞなるらん 郭公

夫木集 浪路隔つ磯辺に桜咲きぬれば沖つ白波をかけてぞ見る

山家集上 あはれなる磯辺の岡の松風をかこちて聞くは寝覚の袖

同上 下 波よせて磯辺に寄するあら神は志なきをやむくらん

磯の浦 岸の浦磯の方に浪せかれ磯間の浦に舟出

万葉第七 磯の浦に来寄る白波かへりつつ過ぎかてなくは岸にたゆたへ

新古今羇旅 一夜ねし磯の浦辺は舟出しても立ちうき影の名残ある哉

磯枕 磯辺に旅ねする夜の夢路を見し 古今集 石枕之七夕の歌

めぐりあふ夜はを待つべき 磯枕は波の磯辺に旅ね

さゝなみや…あまのよみ

拾遺集 旅泊の波 たちかへり舟を泊むる夜の磯枕あまの苫屋の浦

堀川百首 秋はてし天の岩舟出てこぎゆかば磯にや枕さする 顕仲

新古今 羇旅冬 磯枕木の葉は波風やこそあらし我すらん

拾遺集 旅ねする…磯枕波にさえたる我涙かな

未来集 さゆるよの天の川原に枕して逢ひ見ん事を待つ 隆季

同集下 さゞ浪や岸の上なる松にかよふ波のよるぞ涼しき磯枕かな

磯ちどり 声も出

古今 ちどり さよちどり磯辺にあそぶあはれさに沖の白浪立ちもこそすれ

新古今冬 風吹けば波を岩ねにかけつゝ磯ちどりこそ鳴くなれ 花山大臣

磯波

夫木集 磯ちどりの波をかけり

未来集 夕暮は山松かぜにかよふらむ磯の浦の磯波のおと 雅経

夫木集 松の風まさごの橋を打過てその磯あらき磯波の音 同上

磯のをとめ

家集 いかなれは磯のをとめも心あらは我沖つ波をなにとなれん 家長

磯路

夫木集 あまつくも見えり 大君五十をとめてよ見つゝ

夫木集 ふきまてゝ松の志つえにさかる磯のいそちにかゝる波も嶋 為経

於イ 名寄上 波よする浦はへく舟のこつゝみいそちを過てぬれし波か 経継

新続古 ソ中 さつりはるはさらにかけりにけり いそち刻ぬるさかみ浦波 経継

続拾 ソ上 我来ては我をも見ると志よりていそち刻ぬる志らみ磯松 法皇 玄覚

続古 ソ中 あら磯はにしもかくてすゝめるきのいそちの波を被よみつ 行能

風雅 ソ下 しらてもゝちの世もよやくいそち路のゆく鶴の羽も 為兼

磯の波こひ

古今 ソ上 君とれのをとめやいつらすゝる磯のいそは波か沖よりかけり よしゆき

磯ね

磯邊に藤さかりとそいへり 磯枕の心合せていふへし

六百番 二十一番 左 清しかく獨り磯ねの秋乃よに月もあらしも浦を過き 後京極

夫木 百首歌 沖つ舟いそねの近き岩枕なみ波にも袖はぬれけり 源光行

磯のなかれ

家集 住よしの磯のなかれをつみそへて浜千代の数もしらす成らん 忠岑

磯まくら

磯邊に寝る旅ねなり

夫木 磯邊をいかにせん世をうみきしのいそ枕旅のそらなれはかなしき 源仲正

磯貝

いそ貝は貝の一名也 かたつかひと見えり 石貝ともいふ 鰒之

和名抄 鰒は魚の名似蛤偏著石肉乾可食とあり 冠雉

巻二の六丁にあり

万葉十一 みなと入にほされる磯貝のかた思ひのみ 笑はれにけり 人麿

磯ぶり　石根之ふり給のよし也　十八丁にあり　万葉抄云相摸國
風土記曰見越崎毎有速浪崩石號伊曾布利
謂心ハ石振之云ゝ　波のたちさわかるよしにて　いそふりとも風しぶりなと
布利と清音によみつるハ可然
土佐日記　いそふりのよする磯にハ年月をいつともわかぬ雪のみそ降る
万葉二十　大君のみことかしこみ磯にふり海原わたる父母を置て
まくら詞　いそふりの事を合せ考へてみるべし　磯ぶりつる波のいそ
を合せてみるべし
磯やかる蜑
山家集下　風あらき磯にかゝれるあま人ハつなかぬ舟に心ちこそすれ
磯うつせ尾

続古秋上　あかつきの磯のまさ木の枝またりたて袖ぬらしける手ならひの文
磯ちかき波
夫木百首　冬の夜ハよそにしれともみえぬ千鳥の磯の浪よするらし　順徳院
光孝天皇五十首　千鳥の磯に浪よするらんとぬれてなかぬ日そなき　光俊
磯鳴
洞院摂政百首　さよ千鳥あら磯波のよるさむみ衣手さむくなくねん　為家
磯もとを見せける
堀川百首　さて丸き磯をもとめる沖に出てよられぬ舟ハ組まれ　親隆
磯うみ
七社百首　風吹ハあら磯のみゆ波のよりみちの世に出ぬ身そそなかりける　為家
ゆら磯
ゆりぬる磯　大磯小磯　川の磯　波の磯ちかきなとにも

もあれ礒　みさこゐるあら礒　ゆふつる礒　波の礒
以上何も哥　其外にも出せり
なるし　勤の字をよめり　いさをしきの略言也とせり　功し
き事しるさるらん也　源氏竹取卷にいとゆかしくいそしく云々
とも見えたり　又以為にの所にいへり　続紀の詔詞に如此之
状乎聞食悟而歎将仕奉人者云々　此字の後に志純一也とも
忠誠也とも見えれはまめまめしく訓むへく思へれとも五十一の頌に歎美
明美とある美の字つれはさら訓くらしれイソシクと訓むへし五
七に其人乃宇武何志岐事数事乎遂不得忘止とあると十三の頌
に伊蘇之美宇牟賀斯美志不給止自とゐるを合せ見訓むへ
きを知るへし　五十二の頌に加多自氣奈美伊蘇志美思坐須以

そしこは勤しみて勤しとよみるをもあはせて此いそは功のつま
る言にて功しき事とよむへしと解に云
万葉四　梁とりを飼つらへめく悦しきこゝはあめくもたちわかれ家持
られは海とふるさの一首の意は我は君か奴のめくつ見へれは海よ
くつくあらけりくわあらるへくもあらねとこゝとたれよあるの詞
まゝなるし
以上もちく　敏達紀に勤乎を以悦しきと訓ると同し詞なるへく
る　此哥の意をよめる事玉勝間十三の九丁に後あり
万葉十一
七の哥　我玉は常世にあらん父母つるなやしき気もあつらよ泉
の河によるちかせるまゝのつまそを百かへらん後はつゝりの
おほさらん以上もちくみれは神あるらあらし

説を云は日本紀に長又魁師渠帥なとを訓て勇男の事とす宣
長は勇長之ことにつり日本紀ニ功勲又幹古語拾遺ニ忠誠をいれ
さをしとよめるは勇ミ雄々しき意之とこそ侍れ
いそひたひは　礒額之事安斎随筆一の五十四丁にいふ事あらし
の冠といふは巾子なくて額をあらはしたる作りたる冠なり元服の
時に用ゆる冠なり寛永廿年癸未九月廿七日紹仁親王元
服次第ニ理髪其儀先以左手取御冠拔巾子如元置之〈中略〉
次取巾子入御本取以左御手奉令押之〈中略〉次加冠人著圓座
理髪入礒額畢復座○巾子とは冠の筒の如くまとふる處をいふ
礒といふは額より額をあらはしたるなりさて巾子の付いま
つ流をくりを巾子の内へいるるこたの流をあてゝ押へしめます
るとなるは其巾子にさし添へしをつらぬかんとて押へしめをまるく
扱其後に礒を流らるんとてある形なれは此いそといふことをしらしある
なりとそいへり
金葉集下にあるいそのかみふるきをいふ事もあらん
石上みし世　石上の神社は布都御魂なるを神名式に布留御
魂といへるに依てフツとフルとの差別の事又此神社の由来よし
の事共古事記伝十八の五十二丁より委くいへり
続後撰　いそのかみふるきをいふ事も今はなきの
さいはそのふみなるとつたふるは宣わる枕詞なるを古に
くちなみてなるといへる事をあやまりといへり
いそのかみふるまちれ　拾遺之

古哥　まのあたりや山もとにかよひ近くとも心をはまかれせしはし橋

五十の首　増補類林抄十二の廿二丁に云魯生といふ人の唐の呂氏

元年中に耶鄲といふ旅宿にて呂翁といへる仙人の枕を借て

ねふりしに其の内に五十年の栄花を極しと見けり甚たゞかに

粟飯一炊のほとなりけり　枕中記にみえたり　此事前漢二十年後

給唐土の郷事也

新古集首　寝覚され我もむかしてはかなくも五十年の枕かはしたりし

新古弟　秋をおもひ枕の上の露の音よいそちかつて哀愁をとしき

続松下　ねさめのうへ夢にはかなくも中にいそちかまりの夢を見る枕あさき　数そく

いそうしき　関の字をよみぬり　桐の木の葉いそうせは浮舟寒くて

いそしもいそしこれはうわぶ後落葉いそしもいそしてはかなく

いそしくもいそしとよみとれは

続古今集　庵の雪にうもれて世に出しほそみしをるき筆の跡

残解云庵に雪のふりつもる来てみれとしけしくも古人のあとをも

筆をいそくなとなどあらる筆をいそくといふ事を侍とりて

五筆に云今集をいそくといふ綱信に筆を給りねさせしや

此の事をあはれんとせることを以て古哥によみしたるとも哥甚

人のくに得して歳暮の哥にして春を侍事といひて其

さまにいひしいそくいとはしてみの用にあらすしてあるは事をいふ

あり事の気をいそくしといふも此方よりも出てそれ其称る

とかく何のいそきのいそきとなりくあるも甚用にあらすとも

ゐるといへりされハ歳暮の前よりも去年よりよめるをも歳旦し侍
の前も人の雪を見ずしてぬるまゝにさていハ歳暮年始の也
なかるべし用事の多きなれバ志らずとよめる講
解のごとく春を待んにもあらぬハたのしミあらバ春を待
事あれバいとハ雪をみんと来ぬ事のいとはれなバ迎へとふへり
永観三年
春なりけるあまやよそれとはいへるきミのいそがしくのことしまき　能宣
雪を 冬の秋　老の世ハいかにいとふらん春は年もいそがしきなかりけり
猿衣四の中三十丁ひとりあるとくのりありつゝいそがしき人ハあまた
しきりにしてとまる人にいよいよハいそぎなくて別のかなしひて
なかりけり
いそがしきかな

雲鼓撰　旅する人もいそぎ出て旅の道志らず似ぬ暁の宿
いそぎねられぬ夜る　いそぎねぬ又いやいやねられぬあちらの人のいふし又ねふ
ねのねよいそがし
古今 俳諧　いそぎ出て上の悪の神ほどにたかるに我いそぎねぬるよし人志られ
いそがし　いハあの短夜にて遊びをするよくいへるも又いそぎ発語
よしてそらへりの後あかつき枕さむしにそくへるに会人つらも
あらみめ常神祇にまきつ喜ちぬおのれを食せんとぬるま
く志らふひとめあそびてきといへるとたとへるをハひとし
ひとあそびハひとめのかなてとを鉤あそぶる言也
第四巻十三 もくの前　志る母をとらふを志られ志る文をとらくを志らふ
いそぎもしをとらよ云々

礒の濱

来るゝ何方に妻を鳴く夜の濱千鳥出る磯に足はぬらして 猪熊

妻その上みやしろ

古今和歌六帖恋 恋しきは妻そひのその上みやしろの葉さへおく露の袖 信定

年の心てき

そこにある　古事記傳廿二の巻に妻そひあるをもいへり発端

まつ副居哉(ソヒヲルカモ)へと契りしへりあるに妻らのくれそこ

も今の世にも言ふ夫婦(メヲ)にして何事をもそふと云となし

猪黒田宮の段に二柱相副而(フタハシラアヒソハシテ)とある傳廿一の四十七葉にいへるなし

とみへたり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan